

わが小兒の小さき夢枕を伽したるが、先づわれを迎ふ。火鉢の傍には、午後に来りしと覺ゆる新聞號外の、何時しか小さき人に持たれけん、その端を握りたる跡皺だらけとなりて、手傷さへ負ひたり。彼が何の嬉しさにか凱歌擧げたらんを懐ひはからる。

今日の家事は、平常に變れることも無し、唯だ家人の特に告げたるは、前栽の飛石の上に置ける小鉢の無名樹が芽を發せりといふことなりき。

こは尋常に變りたる家事ありしよりも深くわが心を動かせるわが事なり。芽發きたりと聞く耳よりは、足先づ進み、雨戸を開きて庭に出づれば、朧々として春を催せる月影を、宛然夜の恩恵にして、枝容曲折したる夫の無名樹は、小さき鉢に小さき幹を斜にかざし、蘚苔と花崗岩の片石とにその根を護らせたり。眼を寄せて枝頭を凝視れば、實にや、今長き冬の眠より醒めたるがなほ見果てぬ夢を帯びたらん容にて、榮める新芽は發き出でたるなり。

此は、人の眼なり、暗の光なり。

數年浪華に住みながら、茸狩はおもしろきものと聞きしまゝ、絶えてその興を知るべき機會を得ざりし身の、去年の新嘗祭日、友に誘はれて、河内の天野山に半日を此遊に暮らせしことあり。

錦溪温泉とて、高野鐵道の終點たる長野驛より七八町、鑛泉に心を洗ひ、酒と肴とに腹を充し、忙中の閑を消するには便好き旗亭に、先づおちつきて、其處より車通はざるほどの山隈田畦の路を辿ること一里程、後村上天皇行宮址として觀月の韻跡をさへ留むる金剛寺に遊び、寺を南に距ること數町、唯ある松林茂き小山に分け入りて、嚮導の教ふるまゝ、樹蔭の叢を覗へば、宛然世を避けながらなほ知る人もあらば訪ね來よかし、世に出でば相應しき用にも立たんと、ひそかにその意をほのめかしたらん隠者とも見るべきか、さらすば、緑の色の漸く中年に及びたる松の、やがては千年の霜雪を凌ぎ、龍虎の枝幹天にも嘯かんとするに、なほ老いゆくを惜みたる若々しき氣まぐれより、端なく、兒童に扮したる假の姿とも見るべきか、此處に彼處に、頭を傾け身を斜にしたる、或は富士見西行の笠の面を仰ぎたる或は石と石との間に

居心の狭きを嘆ち顔なる、或は土を抱き、或は樹根に衝突して痛いげなる天蓋をかざしたる、拳をさし出したる、孰れも人の自由に採るに任せたる松茸の、興ある姿よ、味ある生命よ。

此自然の瓊瑤、わが生命に一掬の泉を興へ、生命より生ずる活動の力を興ふ。籠に盛り來りて、大皿の雞の肉と共に、鐵鍋に煮て箸を舉ぐ。貧乏といふ名はあれど内容に富みたる徳利の酒を、眞柴に粗朶に温めて、杯を重ねれば、身も心も秋の天より清し。

斯かる興に樂みたる後、殘肴剩酒は嚮導の爺に興へ、餘れる茸を盛りたる小籠を提げ、陶然として山を下りつ。小松を抜き野花を摘む道の傍に、地に這ふばかり矮き小さき樹の一二片の紅葉を點じたるが眼に着き、満天星か何ぞと思ひながら、捨て難きまゝに土を掘りて根こぎにすれば、さほどの損じもなく美しき紅葉ながらわが手に得たり。蕪苞に根を巻きて松茸の籠に暫時の宿を取らせ、其夜わが家に持歸りて、凡そ紅葉すべき植物の名をしらべたれど、多く草木の名を辨せざるが上に、一

二片の小さき葉のみなると樹の曲りくねりたる姿を思ひくらべしのみにては、何の樹なりとも定められず、されどわが賞づるは名にあらず、唯だその枯れたるが如き枝に一二片の紅葉の留まりたるを愛し、端なく路傍にありし美しき天に、低く秋を飾りたるその自然の生命を愛するなれば、唯だ無名樹にて足らんのみ。

此無名樹は、わが手に小さき鉢に植ゑられ、蔽ひたる土の上に、寒霞溪の呼猿洞に得たる蘇苔すゐがひと同じ讃岐なる白峰の兒ヶ瀑こゝろに得たる石とを置きたり。一の鉢は三箇の史蹟を有する自然の面影を寫したり。われ之に對して今の世の外を懐想す。

されど、霜の秋深くなりて、雪の冬やがて來りぬ。寒霞溪の苔の青さすがたは衰へず。兒が瀑の石は依然として瘦せざるに、無名樹の紅葉落盡して、枝寒げなり。冬は葉落つべき樹なれば、自然の生命に障あるべくも思はれねど、なほその哀れなる姿の何時春回るべしやと、覺束なき心切なるほどに、小寒は過ぎぬ、大寒は過ぎぬ。立春は來れり。わが家の小さき人も、年一つ重ねて、這ひまはりたるが、立つべくなりぬ。されど無名樹は、依然として枝頭に春の消息を胚胎みしとは見えぬ。隣の蕎麥は葉既に榮

え、對面の海棠は若葉きははんとし孰れも夜の市の店より貴からぬ價もて此處に移されたる苟且かうまの生長とは見えす。其隣に列べられたる笑面の蔦蘿、吉野川の邊より來し虎耳草等ゆきのしたも、やがての榮華を期すべき希望著るきを、何故に汝のみは遅々として春を催さる。天野の山の戀しくて、魂は疾にその故郷にや歸り去りけん。在るべき自然の地に在らせずして、人の手もて塵の都に移せるはわが私愛の罪なりしか。さあれなほ春來るべき節には日あり、争でその恩恵に漏らすべきやなど、繰返し思ふを常としてわが日は過ぎぬ。

世は戦争の時となりぬ。人は皆血を流し肉を刻みたる犠牲を、捧げて得たる勝軍を祝するに狂はんばかりなり。われも國の民なれば、さほふ心、他に運るべしとは思はず。されど退きて省みれば、人事の轉變に比べて、自然の何ぞ悠久なる。自然を愛するの情は、人事に斯の如き風雲の變化、哀歡の交錯ある毎に更にその深さを増す。わが小さき此無名樹に對するの情は、やがて大なる自然を愛するの深さを示せるにや。自から知らずしてなほ此無名樹の春に逢はんことを望むこと切なりき。

友の軍に従ひて遠征するを送りたる夜、車夫さへも、干戈取りて遠く戦の庭に馳せんと氣ほふ心根の優しさを聞きたる夜、號外の勝軍を報じたるを聞きたる夜、酒の宴にさへ敵愾心の溢れんばかりなる國の民多きを心強く思ひたる夜、歸り來れるわが家の今日の生出たる事は、わが心を痛めし無名樹の若き春の芽を發らし消息なりき。

國一つ得たる歡喜の情は、王侯將相の上にあるべし、此無名樹の枯れたりと思ふ今日、花も咲くべき希望多き春の芽の發たれたるは、わが心の奥の深き籠に秘められたる、自然の生命の活動を歡び叫ぶ聲の表彰なるべし。

名無き處に神の榮光あり、名無き人に天の恩恵あり。名無き犠牲に世の功勳あり、名無き樹に自然の生命あり。

此日、得たるわが家の史は是なり。(三十七年三月)

觀魚

三十八年七月二日、親朋五人、(稻村香池園、米山梅馨、遅塚麗水、石川半山)伊豆修善寺に會するの約あり、予は約に先だちて前日沼津を経て三島より大仁に汽車を下る、人車一里程、大仁驛に近き一小山、山骨露出して崢嶸の趣あり、狩野川を渡りて山峽に入る、溪流石に激して一水來る、桂川是なり、山の姿水の態風景依稀として大和の月瀬に似たるを覺ゆ、しかもこの地予には初遊なれば、矚目皆新なり。

修善寺に着き、豫て知照しある浴樓養氣館に入る、同人未だ來らず、相知れる館の主人また外に出で、在らず、女中に導かれて最奥の池亭の一室を占め、獨り坐す。

池は百坪許、屋後の桂川の水を引いて注げるなり、水色朧明、鑛氣を含むが如し、鯉あり緋鯉あり紺あり金魚ありはえあり、水馬もまた相伴ふ、島あり、島に松あり小石祠あり、菖蒲これを遶りて水を出づ、菖蒲島の名あり、予が占めたる室を得月

窩と名け、相對したる一亭を水心亭といふ、島には飛石傳ひに至るべく、池魚は椽に踞して靜觀すべし、池の周圍には、綠陰幽草、影を水に浸し、石榴花、てまり花水に臨みて開く、紫白と眞紅とが青葉に點綴せるながめ風情を添ゆ。

予は久しく斯かる池に臨まず、臨むと雖も、斯かる亭に坐せず、坐すと雖も斯かる境に親まざりしなり、此の日此時、樓靜にして夕陽樹陰より水に落ち、魚は陣をなしてその光に浴し往く、椽の柱にもたれて端なく會遊の境蘇洲の滄浪亭と留園との風物を併せ憶ふ、やがて胸懷何事をも意識せず、唯だ當面の風光に對す、此懷買ふべからず、與ふべからず。

榴花一片、舟の如く水に浮んで來る、湛々たる平波一點紅なり、尺餘の一鯉忽ち身を翻してこれを嚙む、嚙みて昂然たり、誤りて嚙むべからざるものを嚙みたれども、吐くべきにもあらねば嚙み了りたりと言はんが如き面つきして去る、榴花また流れ來る、小鯉あり、また口を開いて殆ど嚙まんとして止め去る、更に小鯉あり、走り來りてこれを見、その餌にあらざるを疑ふが如し、相次いで鯉群來り終に口吻相接

して榴花を弄ぶ、その餌にあらざるを識るに遑らざるが如し、花は波上に掀翻せられてさながら風にもまろ、胡蝶の如く、瀾に揺られく浮ぶ、忽ち鳥あり、軒を掠めて過ぐ、影水に落つ、水に聲あり、波大に動きて鯉群倉皇縮をふるひ尾をふるひ四散五裂、渾れる水底雲の如き裡に没し去り、花片獨り寂然として波紋の上に浮ぶ。一波一紋、水波は夢よりも淡く消え、花片は静に亭下の巨石の陰に没し去りぬ、宛然興生じて來り興盡きて去ると言ひかほに微に笑へるか覺ゆ。

静なること夜の如し、天はなほ空明なり、水馬一個水上巡羅船の如く飛石の彼方より出で來る、水泊に何をか物色するぞ、西に往くかと思れば忽ち東に返り、彼岸の菖蒲の根に留まらんとして忽ちまた此岸の樹陰に息はんとす、汝は是張順か李俊か、はた阮小五か阮小七か、汝の楫を操ること何ぞ巧なる、汝の舟馳すること何ぞ快なる、一日の速力はた何湮ぞ、水に來り水に去る、汝が水上生活は、なほ是鯉魚と共に樂むか。

水馬はすましがなほる、夕暮の景色と共に静にしてまた多少の波紋を留めて去り

ぬ、夜の色漸く池の面を籠め、桂川の瀬聲、初めて大に響く。

夏の日長し、温泉は心さへもゆたかなり。

つ き 草

表は板塀に格子戸、それを開けば一坪許り庭と名くべきほど無き空地を玄關前に控えし家はわが二年前の住居なり、この庭ならぬ庭の右側の垣に沿ひて松あり葉疎なる枝は垣より外を覗きて風情を扮る、松の下には躑躅、白丁あり瘦せて見るべき姿も乏し、夏の初、此處に牽牛花の種を蒔きたれど生へざりき。

さるほどに塀側に横はれる二三の石の陰より一本の草生へ出づ、乾びたる土の他に草の生ゆべしとも思はれぬ處なれば、この一本の名知れぬ草をも、沙漠のオーシスのやうに眼を注ぐるほどに、その芽日に増して生長し、草の葉は鴨の脚の如く著るしく枝さへ茂りたる姿を見るに至り、初めて月草なることを知りぬ。

豫期せぬ處にしかも花をさへ見るべきこの草、碧蟬花といひ露の花といひ鴨の脚と

いひ、詩歌に詠めらるゝ草なれば、さして行く方も無く思ひ縊ひし人の端なく訪ひ來し心地してわが喜びは限り無し、遠からず月の清らかなる頃には、彼の花は宛然深山幽谷に唯だ一人住みたる女にて少しも塵寰を知らざる身の、なほ青春の時を得て、戀をも愛をも知りそめたらんやうに、あはれにゆかしき夢のまた夢の世に榮えんやさしき花を待ち居たり。

自然の力を靈妙なる、月草は或夕新月の淡き頃、わが望みしまゝ、碧露の如き幽美の花を開きぬ、後庭の牽牛花ははや種子となりて萎れたる時、天上の星月獨り夜々の清光をわが庭に投ぐるのみにて、地上よりは何の花もそれに應じて自然の榮を見せざる時、方には秋の神姫がその寂しき幽かなる秋の美を集凝らしたる露に、ふつと息吹きかけて作成したる一點の眼の如き花を見ては、更にまたその花の如何にも土壤ゆたかなる露の恩澤多き叢よりならで、松の小陰の貧しき地味にさも辛苦を経たるかを思ひては、尋常の花に對するに比べて、わが情懷殊に深し。

朝に出る時、夕に入る時、われは格子戸の開閉に、花の數の著しく増すを喜び、蒼

の開きゆくを樂み、花の露の恩澤にわが塵土の念を洗ふことを得て、限り無き感興胸に湧き、おのれもまた自然と同化し難からぬを覺えしなり。

隣家に五歳ばかりなる女兒あり、その兄は七歳ばかり、對屋にも同じほどの男女あり、これ等の兒等は、わが家の前なる空地の草を齒となして遊び娛しむを常とす、神の手もて彫られたらんやうなるその天真の顔、黒き中に罪の陰翳を少しも宿し居らざる眼などを見る毎に、われは唯管純潔無垢の人の美を感せしなり。

日を経て月草の花の數増さずなりぬ、増さずなれるばかりか、その數を減じぬ、一花消え二花消え、やがては孤花纔に枝に萎れてその枝さへも折られたる、わが神を深くも寓せたる花はついに影無くなりぬ、自然の榮枯ならで、人の手に奪はれたるなり。

この幽眇なる唯だ一點秋の美を現じたる月草の花を、人の美しき坊ちやん嬢ちやんが、何時しか格子戸細目にかいまみて一片を摘み二片を把り去りたらんとは。

わが大人として感せる美は、彼等も兒童として同じく感じ、その美をわがものとせ

では捨て置き難くなりしなり、可憐なる月草の花、可憐なる兒童の心。
 その翌年、月草の花はまた秋に榮えたり、隣家の兄なる坊ちやんは、學校に通ひ、
 妹なる嬢ちやんは、ものゝ言ひさまや、女のやうに見え初めしか。(三十八年五月)

燈

半夜の夢醒め、起きて戸外に出づ、天は星の眼ばたき、地は霜の衣を被ぎ、静嚴の
 氣骨に入る、生籬の上を越えて枯野、枯野を経て麥圃、麥圃を経て蒼鬱たる小林樹、
 その右に鐵路に平行したる城の如き一帶の煉瓦塀、夜の遠視には唯だ黒き山に似た
 り、塀の上之列べる七箇の光、暗を透してわが眼を射る。

日暮るれば、此七箇の光、雨にも風にも月にも、毎にわが眼を射る、他に少からざ
 る常夜の燈、同じくわが眼には入れども、その光線弱く薄くして明滅隠見常無きに
 反し、此七箇の光のみは強く明かに光耀四出し、暗には殊に鋭く、目ばゆきを感じ
 しむ。

家を移して月餘のほどは、何の燈火とも思はで經しが、人に問ひて、彼こそは堀河
 監獄のなれと知る。

世の定めたる矩を破り、心の許さぬ事を行ひたる際はいふまでも無し、しかも心に
 許したる事を爲し、世の定めたる矩を思はず越えて、端無く世に罪せられたる人も、
 齊しく世を暗み世に隠され、此七箇の燈の下に、今は何をか夢みる？。

暗には光を求む、夜には燈火を求む、盲は眼を求む、人の心にも光を求め燈火を求
 め眼を求むべき暗あり夜あり盲あり、若し暗のまゝ、夜のまゝ、盲のまゝに動きた
 るものが、形象となりて外に現れんには、誰かはこの七箇の燈火の下に、木の枕し
 て冷かなる床に夢を照されざるものぞ、但だ動きたるものゝ未だ形象とならざるほ
 どに、光あり燈火あり眼ありて、心中の暗、影を失ひ、心外を照らさんこの七箇の
 燈の下に赴かざるのみ、われこの燈の光に眼を射らるゝ毎に、夫の金の七の燈臺の
 間に見たる人の子の如きものを見る、その人の子の如きもの直に光と共に來りてわ
 が胸に入り、「我は生けるものなり、前に死せしことあり、視よ我は世々窮無く生きん

我は陰府と死との輪を持てり、と。わが心に呼ぶを聴く、わが肉躍る、わが心活く。戸を鎖して再びわが平和の夢に入る。

われは今、郵船會社の薩摩丸の船室より出で、甲板に立つ、時は九月二十七日の夜、萬星皆その眼を瞑ぢ、天は漆より黒し、わが身邊の咫尺、唯だわが船の上なることを知り、船の往くことを感じ、舷に激する波浪の音に海の上なることを知るのみ、極目乾坤分たず、一船寂として聲無し、風あり、大荒より來る、露あり、冥茫より零つ、袖搖さ、衣濕ふ、方寸の中に動くものあり、磅礴して抑ふべからざる一氣、我に凝り、沈々として動かすべからざる力、我を惹く、蒼茫萬古の情、馳せて神に之き、魔に之く、而して後には、乾坤の黒鐵圍氣に包まれたる我は、萬仞の海底に沈まんと欲する心あり。

此刹那、近く一點の光見ゆ、魔の眼か、神の睛か、黒乾坤の裡に動く。

あゝ、何來の船燈なり、船と船、此大荒暗黒の裡に相逢ふ、此時此燈火は、言語なり、千萬の敷を重ねたる人の語よりも更によくその意を盡す、彼の船に乗れる幾百

の人の運命を、唯だその一點の光に語る。

我が海底に沈まんと欲したる心は、風よりも疾く、馳せて彼の燈の中に入る、我は往く、彼の船は來る、往くもの、來るものを懐かしむ、來るものは往くものに慰安を與ふ、此時此燈火は懐往の標示なり、希望の標示なり、我は觸るべからざる燈光を殆どわが手に擁せんと欲す。

如何なる賢明懇篤の教師の説理も、如何なる深大なる思想の記録も、此黃海の暗黒夜に、一點の光をわれに示したる燈火の靈化に如かざりき。

正に是わが八年前の心事、今はた夢に入つて來る。(三十八年三月)

雨脚

春眠、啼鶯に喚起さるれば更に點滴の響あり。

小さき庭を眺むれば、棕櫚竹、葉蘭、橘、沈丁花、梅、竹、松、蘭、躑躅、海棠、南天樹、公孫樹、女蘿、山椒、木瓜、皆その葉を染めて色あり、雨は絲よりも細し、

その地に落つる雨頭雨脚盡く態をなし姿をなし、更に心あるが如し。
 葉に落ちて葉裏に危く轉るもの、輕業師に似たり、掌の如く雨を受けたる葉、頭を
 低れ傘の滴るゝを待ちて昂然たるは、天の洗禮を受け得て安じたるが如し、松の葉
 の塵を拭ひ、緑を添へたりと誇りかに幹を滑り落つ、海棠の若葉を私にすべり落ち
 てそのまゝ根の土に浸む、土を帯びて跳ねたるが盆栽の鉢の周圍を塗りたてゆく、
 左官ならで自然の鏝に巧なり、落ち來る形は見せず卒然地に跳りて小坊主の幾つぞ
 戯れる、板塀を馳せ落つる一滴二滴、競走の遊盛なり、土より私に首さし出したら
 ん小さき石の頭に打ちあてゝはねかへり、あて損じたるを愧ぢ容に消ゆる消ゆるがあり、
 にはた水に輪を描きながら互にその輪の大きさを競ひ、中には泡の玉を作りてした
 り容に浮び、幾つもならびたる隣同士、聞かば聞えさうなる聲かけ合せて飛沫を合
 圖に消ゆるもあり、玉と玉とが相合うて、鴛鴦の番の離れ難くや、岸に至りて見え
 ずなるもあり、人には知られたく無しとやうに、木葉の蔭にしひ落て私語くもの
 も少からず。

大なる音より小さき音に至るまで、自然の律呂を奏で、春の朝の樂は妙なり。

車窓の曙

時は十月十三日の朝、處は東海道鐵路西行列車の一室「米原」と呼ぶ聲に眼醒まされ、時計を見れば五時三十分。稻の香、室に満ちて、新なる氣、わが身に生く、坐せる北側の窓を開けば、車は方に黄雲十里の當中を馳す。

萬頃の禾稼、露の玉を綴りたる、皆生命なり、皆勢力の榮光なり、粒々活きて將に躍らんとす。

稲田の盡きたる一角に湖水現れ、烟波はさながら大地の夢より醒めたる眼の如く、静に情のうるほひを湛へて天の面影を映す、岸邊の蒹葭のさゝ緑とりたる際に、主無き舟一艘、迢々として湖色と共にわが視線より離りゆく。

稲田遙けき彼方に、高さ兩山、左右より肩のうねり、ひたなだりになだりて、その裳裾の將に盡きなんとして低く相逢ひたる處、更に遠く一峰あり、兩山はばかした

る煤竹色、一峰はそれよりも淡きに、天は色とは名し難き曙の、絹素か面衣が、その低れたる端に、眸の如き星一つ、諸天の坐位悉く夜の宮の宿直果て、去りたるに、唯一坐なほひきあけの殿するにや。

その星よりも高く、一點の鳩靜(或は鴻か)ほのに隠る、隈無き姿の天に冲ると見る間に、忽ち星は見えすなりぬ、夜は名残無く明けたるを、鴻の使者に託して、天の宮居に告げんとすらん。

列車は馳す、時は午前六時頃。

矚目の光景、一變す、能登川の驛をひた走る頃、朝霧一面に籠めたり。

家は軒の一角、樹は梢の頭、林は水墨を點じたるが如きその一斑、案山子はその笠のみ、稻田も廣告標も、漠々濛々たる裡に隠見し、車は霧の海を蹴て行くなり。

唯ある赤松の山一つ過ぎたる時、霧は拭へるやうに消え、數町を隔てたる小山の麓に、朱塗の鳥居鮮かにして、松林の傍には一隊の黒帽海老茶袴の人々動搖し見ゆ、山の上には、神社とおぼしき葺の屋も見ゆ、何れの男女學生ぞ、何の宮にか詣づ

る？。

此一幅の繪畫は忽ちまた走馬燈の如く、彼方に轉じ去りて、白き壁、蒼き樹、黄なる田は、一條の刷毛にてはきたる線の如くわが目をかすめ去る。

湖水は再びその岸邊を見せ、岸遠からぬ水の上に、帆を舉げかけし舟あり、帆の下には、人あり。

刹那にして稻田の眺望は左に轉じ、左に眼近く山を見る、さて、山の腰を一帶の白霧、雲のやうなるが蓬々として罩め、山下の村の邊に落ちんとして落ちず、折しもあれ、山の峽なる松の間より、赫々たる朝陽の光まばゆくあらはれ、煤竹色なりし遠山は一齊に紫となりぬ、萬誓をつるべ放ちたる光箭に射ふさげられたるわが眼を、再び開きたる時は、萬頃の稻田再び眼の前に展べられ、天地開きたる壯觀、譬ふる言葉を知らず。

六時十五分。

八幡の驛を過れば、人ははや起き、雞犬外に出で、遊べり、名古屋交趾とシヤモト

の雜種雞が、圓らかなる軀に紅冠を戴き昂然として妻妾を率ゐ、嚶々の聲をさへ擧げつゝ、朝の榮にほこる。雀は軒に噪ぎ、犬のあて途なく走るも見ゆ。

六時二十分、室の人々、起ちて食堂に行くもの多し。なほ日の光に背きたる山あり。左に山々の穩かに山角を矯めたらんやうの姿にて遠く南を指して立ち層りつゝ、日の光を浴びたるに反し、右の山々は、いづれも嵯嶮として天を刺さんと欲す。山腹山頭に鼠色の雲の衣を脱ぎあへず、中には雲より頭ばかりを出すもあり、一天晴朗の恩威に服せぬ相も見ゆ。

屏風を列ねたらん一帶の山の麓を一線に劃りて敷きたらんやうなる稻田の上に、低く舞ひゆく鳥一つ、恰も落伍の人の如し。

茶畑あり、葉上にかけてわたしたる蜘蛛に置きたる露は玉よりも清し、家々の裾、垣根に、烟將に沈まんとす。

天地を籠めたる天の煙霧はや消えて、次にたなびきたる人の煙も、是に於て消ゆ、六時三十分。

桔槔はつるへ、動く形と聲とありて動かす主は見えず、日傘片手に手拭かぶりの媼の背に負ひたる風呂敷包の裏ぞゆかしや、竹箒持ちたる兒童、稻田に立てる筒袖の、案山子と見れば動きたる。

天は今や一面に碧に、日は輝々として天地に高く臨めり、一二片の雲、山をはなれてたよる方無く孤なるもあり、六時三十七八分、列車はしはがれたる聲一つ出して、驛ならぬ處に停る、靴と草紙とを片手にしたる二三人の小童、踏切ある隄を上り來りて、相顧みて、相警む『大急行が留まつたのだ』。

草津を経てより、矚目の形象は、また變化無し、天然の風物は明晰となりぬ、山水丘陵草木の形象色相は固定となりぬ、琵琶の湖、湖中の白帆、瀬田の棧橋の一軒屋に紅白淡濃の蝦夷菊咲きはこりたるに、白き小禽の一群舞ひ起らる、鉄橋の下を籠高く積みたる片舟一つ水に従ひ行ける、案山子に袖の露晞きて持ちたる弓勢の強さうに見えたる、強ひて凡山凡水を彩りたりといふべき。

六時五十五分、車は馬場驛に停まる、それよりは山崎の邊秋草繁さが眼に即さしの

み、次は天を衝くばかり林と立てる煙突の影、轟々たる鐵橋の響、わが目にも耳にも、記さんは餘りに明らさまなる景色となりぬ。(三十八年十月)

踏切のおじぎ

二年前に、わが家を北郊に移してより、わが社に通ふには必ず鐵道踏切を通過す、右の路を行けば一の踏切なり、左の路を行けば二の踏切なり、孰れよりするも、踏切は常にわが行方を横断す、但だ右のは機關車往復のために交通遮断の時間長く、左のは汽車進行の刹那折にふれて少時の佇立を強わらるゝのみなれば、わが通路は多く左に在りて右を取るは少し、しかもまた左の通路には大抵三日に一度、われに辭義する一人の男に逢ふ、わが左の通路を取るは、やがてこの一人の男の辭義挨拶を受けんがためなる如く例となりぬ。

初めてわが家よりこの路を俾して通ひし時、踏切の側に小さく薄き坐蒲團置きたる榻子あり、それに踞けたる六十歳近き男、冠りたる霜降の綿スコッチらしき烏打帽

を脱して、車上のわれを見て點頭をなす、見れば何處にてか識りたる顔のやうなり、われは思はず笑みて點頭を返すほどに、俾は疾く走せぬ。

俾の上にて、此邊われに辭義すべき人のありさうも無し、彼の男は何處の人なりしか、誰なりしかと、記憶を喚醒せども思ひ出さず、長さ面の廣き額に皺深く年の波を刻み、彼の帽に似たる胡麻鹽頭は容易く禿げさうには見えす、二重臉の愛嬌ある眸采若き時は品格もありしならんと思はるゝ、その服装は、股佩法被ひきばつびの風俗、はて誰なりしか何處にてわれは逢ひけん、その日は唯だ曾て相識りたるものがわれに會釋したりとのみにて、其他を合點し得ずして家に歸りぬ。

次の日また此路を通ふ、それかと思はるゝ榻子は踏切の側なる家の軒下に片寄せあれど、彼の主は影も見えず、次の日は、彼また見えたり、此度は榻子ならず、縞毛布を膝の上、肱つきにして俾の蹴込に腰かけ、鉈豆烟管に煙草ふかし居たるが、仰ぎさまに挨拶して笑を含む、われもまた軽くうなづく、俾は走る。

「彼は車夫なりける、われ曾てその車に乗りしことある男なるべし、われ乗りし數

多くして、何等か彼我相關の事故に、彼よくわれを記憶して、かくは親しげに挨拶するにやあらん」とまでは合點し得たれど、なほ何處にてかは思ひ出さざりしが、彼と我との目禮目を累ぬるに及びて、わが鈍き頭腦の記憶忽如として喚起されたり。さてわれ六年前、此邊の某園に小亭を借りて下宿住ひしたることあり、當時われを載せて夏の巷の塵に塗れ、冬の大路の石に躓き、風雨にもなほ額の汗をその日の糧となしたる車夫は少からざりしが、彼もわが小亭生活の折に數次雇ひしことある男に紛れ無し、さればわれを記憶して逢ふ毎に會釋をなすの所由は理路を歸納して解したれども、なほ彼がよくわれを記憶するほどに、我は彼に或特殊の情誼を寄せたりしか、或は何事かに就て彼と我とが縁因を訂せるやうの場合ありしか、それ等の確かと取留めたる記憶は全くわれに浮ばず、畢竟會てわれを載せ、われ會て見、會て識り、會て乗り、會て話したる車夫は世に多く、途上相逢ふも相識らず唯だ路上の人たるに止まる中に在りて、彼よくわれを記憶してわれに挨拶するは、頗る尋常に超えたる趣あることをわれは感せしなり。

日を重ね月を累ねて、年をもやがて歴たり、その間彼のお辭義われのうなづきは依然として交へられ、われは常に俤の上、彼は毎に揚子よかごか、俤の蹴込かまたは軒下に佇立なり、彼の挨拶をわれ受くる時、彼の下げたる頭未だ上らざるにわれは既に彼を背に見捨て去ること多し、恐らくは彼は彼の挨拶をわが受けて返したるや否やを確と認めざりしならんと思はる、折も少からず、されど彼に逢うは必ず踏切にして、彼を見るときは彼がわれに挨拶する姿ならざるに無し、彼我の挨拶斯く數を重ねながら、われは未だ彼と親しく物語りしことあらず、彼我共に物語るべき機會無ければなり、われは彼と語らんために俤を停むるほどの事故無く思出無く猶豫無く、恐らくは彼もまたわが俤近く寄りて寒暄を舒するほどの因縁無く思出無く材料無きならん。

彼に對する過去のわれとの關係につき何時如何なることありて彼を勞せしかとやうの記憶を喚起せんと努めしは幾回なりしか如何にしても具象の事實浮び出でざるまに、わが頭腦の由來健忘なるを思ひて却てわれを小説中の一人に數へしことあ

り、されど竟に彼老車夫がわれに挨拶するの如何にも親しく篤かなるべきほどの恩愛情誼ある關係事實をわれは思出し得ず、所詮は彼我挨拶の交換は、その初めは彼が會て相識れるわれを久しぶりにて見たるがために端りなく懐しと思ひし情を表し、邂逅また邂逅、挨拶また挨拶、その度を重ねるに従ひて、やがて彼の挨拶は、彼我の間に一の約束連鎖となれるのみ、何の意義かあるべき、彼は我に求むる所あるがためならず、我は彼に求めらるゝ所のものあるがためならず、彼は唯だ何とはなくわが顔を見て笑しげに點頭し、我は唯だ何とはなく彼の點頭を受けて返すのみ。頑石も星霜を経て古くなれば苔の衣を纏ふ、苔を纏ふに至れば趣を生ず、相見ても語らず唯だ點頭するばかりなる彼と我との逢着も度を重ねるに至りて情興を催し趣味を生ずるに至りしならん。

踏切には「さしやにちういすべし」との標札あり、われこの踏切近く来る毎にわが心動きて呼ばふ「老車夫に注意すべし」。

われ彼に逢はざる日は、彼に似たるものを見て彼を思ひ、彼に似たるものに似たる

ものを見て彼を思ふ、しかく似たるものを認めざる時は、わが記憶を尋ねて、昔彼に似たる故郷の老僕ありしことを懐ふ、髣髴として彼なり、われを肩馬に載せて脊戸に富士の初雪を見に行きしことある幼時の光景を再現す、この老僕は尋常に優れて篤實なるまゝに、一年の傭期を延してやがて數年わが家入となりぬ、わが僕を呼ぶに「爺や」と言ひ初めたるはこの老僕の時よりなり。

忽然としてわが幼時の老僕は、踏切の側に在り、笑しげに點頭す、三十年前の好老爺われは汝の手に「籠め籠め、籠の中の鳥は何時々々出やる」お月さん幾つ、十三七つ、まだ年や若いな」など歌はれながら抱かれて眠りしこともあり、その顔に髣生ひ出で、むくつけき男とはなれるよ、汝は健やかにして今日までも老を増さず、なほ往年の爺やなるわ、と追憶の影はた消え去りて、彼はその顔のみ似たる老車夫なり。

彼の顔は、われに取りて或時は快事の表象となり、懐想の表象となり、希望の表象となり、感興となり、哀感となり、可哀となり、慰藉となり、これがやがてわが

日の運命を下する徴象となる、斯くわれに多趣多様の感と興ふる彼の點頭する顔つきは、毎に笑ましげなり、その顔毎に春を浮ぶ。

米元章は石を愛して之を拜し、小西來山は、人形を愛して之を抱けり、若しわがこの老車夫の點頭に對するの感を説かんとすれば、元章の石、來山の人形を以て比へんか、その相語らざる處、彼我黙する處、無聲に聽き無言に語る、理棍一杵この境を破らざる處、則ち一刹那に無量の妙趣あり、一點頭に歴切の情致あり。

相見て相語らず、黙して點頭し、黙して別る、彼と我と今もなほ昨の如し、明日もまた今日の如くなるべし。(三十九年)

淡輪日記

○山に生れたる男、煙の都に住み、曩時岩間の水に研ぎし顔、清らなるに誇りしが、何時とはなしに黧黒くなりぬ、人はこれを齡重ねゆくが故なりといへど、此男は頭を横に揮りて、さにあらず石炭の煙日毎に細き粉となりて、顔に塗らるゝが爲めなり、

例へばなほ中之島の松の葉が鼠色となり櫻の宮の櫻が灰色に咲くと傳へらるゝが如し、見よ蚊遣火の煙に桐の簞笥茶色になりゆき、竈の煙に天井の檜板煤けゆくにあらずやといふ、此男、若き血なほ心に沸きて、姿態形貌に意を注ぐの情未だ罷まず、おのれの齡漸く長けて、はや熱の杯を手取る身にあらずとは覺らずや。

○餘りに覺らざる心こそ、眞に若き人なれ、覺らざる心こそ、眞に爲すゐるの人なれ、おのれの年を知りおのれの境遇を知り、おのれの分限を知り、おのれの伎倆を知り、おのれの價值を覺りては、その人はや枯木死灰なり、敲けども韻無く、呼べども應せず、泣けども感せず、鞭てども怒らず、寂寞として趣なし、之を味はゞ蠟を噛むが如くならん、餘りにおのれを知り、世を覺らんは、やがて人を老いしむる門戸なりと知るべし、顔の色荒れゆくをば、唯一に住める土地の罪なりといふ此男こそ羨ましかれ。

○されど人を羨まんも詮無し、おのれを知りおのれを覺るを老いゆく門戸なりと戒めて、それに遠からんと思はゞ、おのれを忘るゝの方便を取るに如かず、おのれを

忘るゝは、おのれの境遇を變せしむるに如かず、おのれの境遇を變せしめんことは終生離れがたき家を、折にふれて離るゝに如かず、家を離るゝは旅行なり、海に住むもの山に往かば、氣轉すべし、山に隠るゝもの海に出づれば、心變るべし、都の人、田舎に遊び、田舎の人、都に来る、おのれを忘るゝ方途ならずや。

○曩日、泉南の淡輪に遊びて、一日を遊漁、海浴に消したる時は、われまことにおのれを忘れたり、幼稚き心生じては、蟹を岩間に捕へて、一かどの功名を得しやうに感じ、少き血沸き來りては、海ばら遠く浪の行迹に想を馳せて、天地の悠久にわが身をも従はせんと思ひぬ。

○天然は、おのれを知らず、おのれを覺らず、おのれを示さず、唯だ人のこれに觸れて思ふまゝ感ずるまゝに任す、わが淡輪に遊びておのれを忘れたるは、やがて淡輪の人事が、おのれの有意なる境遇に遠くして、無意なる天然に近きが爲なりしならん、淡輪の遊に記すべきもの多し、おのれをば忘れたれど、興あることは忘れざりしか。

○鰯は、海の鯉なり、黒崎の岸近き邊、波の上高く躍り、没してはまた躍れるは、正しく登龍の志ありと見るべし、高さに上らんは、なべての人の志なるべければ、鰯といふ魚の上に、人毎の志を行はせたらんやうにて、見るから嬉しきものなり。

○鰯は、團結力に富み、共同一致の行動を取る、彼等が多く集まる海にては、漁舟を覆すこともありとか聞く、團結の力は、小さきものにも大なるものをば敗るといふ例にも引かるべし、淡輪にて、鰯の海の色變るほどに集まり合して、波の上をさながら突貫する軍隊の如く、躍り進み、岸近く押寄する様は、壯觀なり、彼等にも活動の生命あるを見て、向上に燃ゆる情、わが胸に躍りぬ。

○黒崎の丘に、大なる松二株あり、貫之が土佐日記に記されしそれならずとも、姿態趣ありて風韻ゆかしく、昔をしのぶに足れり、辻と稱べる翁の語れるに、近き頃までは古き松三株なりしが、二株となりぬ、最も大なる一株は此村の大風にあへなく伐られて、物の費に充てられたりといふ、この村の大風こそ、何處にも吹く例なれ、天籟はその葉に琴のしらべを奏づることあれども、人籟は、斧をその幹に加へ

て、根を絶ち葉を枯らし、自然の仙境を變じて、荒寥の巷と化するが多し、喬木風多しとかや、多き風は、いはゆる村の風をいひしなるべし、淡輪の村、今は、村の風も靜にて、平和の波は黒崎の岸にゆるく、村民相親しみむさばらきして黄金を夕陽の波に收め、苦まずして、銀を鮮魚の姿に得ること、海の幸といふべし。

(三十七年七月)

水前寺の一時間

●自分が水前寺を見たのは、三十六年九月十四日、博多から太宰府、太宰府から三角まで飛んで行き、三角の停車場から、小舟一艘を備ひ、天草島を遠見しながら三角灣に至り、辨慶の擔ひ岩といふを見て彼が蝦夷から九州かけて至る處にえらい勇名を留めて居ることを感じ(よしやそれが實ならざるにせよ)筑紫灘を隔て、彼が島原なりと舟子に指點さへれて、威ありて猛からず、親しむべくして猥るべからざる温泉嶽の山容に對し、是より先き六年前肥前の茂木なる潮見觀音より千々岩灘

を隔てて此山を見たる快觀をしのび、なつかしさ言はんやうなく、此邊に住む人は定めて温泉嶽の秀麗と筑紫灣の汪洋とにその心を涵養化育さるゝこと深からんと羨ましくもまた旅情に興を添へての歸るさ。

●自分は三角驛から再び汽車に乗り、初めその驛から舟に乗つた時乗合は女客六人男(自分と共に)三人娘一人子供一人、その娘が束髪の前髪を振りながら子供を抱いて「沖なる舟の甲板に」と歌つたこと、舟子が灣内にある水雷艇を指して軍艦の種類を説明したこと、三角山上には熊本暴動の志士六人の墓があるといふこと、三角港を初めて開く時は囚人を使役して幾人かの人柱が出来たこと、その囚人が「娑婆のお人今は米が幾らぢや」と舟子に聞いたといふこと、戸馳島、寺島、藏々の瀬戸の風景思ひやられたこと、天草の今泉山が城のやうに見えたこと、三角の瀬戸に入ると岩石に叢生した松が恰も盆栽の如く、その松の中の邊から雲雀の聲が聞えたこと等をくり返し思ひながら、熊本驛に着き、直通列車發車時間の都合に二時間許の暇を得たまへ俾を水前寺に馳せたのである。

◎残暑の日照る中を驀然、祇園橋を渡り、細工町、旭座といふ芝居の前、長六橋の北を過ぎ、「慶徳饅頭」といふ商牌を見て、由緒のありさうなもの家苞にせんかと思ふ間に車は大通の兩側梧桐のたち列んで涼しげな裡を走り、新代橋その名ゆかしさを渡り、熊本病院前を左折、川に沿うて右折また橋をわたり兩側に柳ある處を経て門に着く。

◎水前寺の景色、泉石築山の眺望をこゝに説くは、讀者に對して釋迦に説法。但た自分が水前寺を觀て感じた事は、大町桂月氏が曾て自分の故郷富士山大宮の里なる淺間神社の園林を見た紀行に、其景恰も水前寺に似て小なりと記した事を實にしたのと、自分が知つて居る岡山後樂園高松栗林公園に比して又別趣の觀を得たのである。◎自分は十餘年前に東京に出で、それから浪華に來た、しかし一年若しくは隔年には大抵故郷に歸る、歸れば必ず淺間神社に詣でる、此處の社地に湧玉池とて清冽玉を欺くやうな湧泉を湛へた池がある、池の外には屈曲した一面の岩石、蜂の巢のやうな石理から何處とは限られず泉が噴く、それが一派の川流をなしてやがて潤川とい

う名で南に行けば今では富士製紙會社の製紙機械の原動水力に供せられて居る、此泉の川となる邊には島をなした丘もあり、橋を架けた築山もあり、水にはやまめ、はゑが遊び水底の石は藻を被いで居る、芝生の地には松櫻がある、保勝の手さへ行届かば随分勝地ともなれるべき資格の佳趣がある。

◎水前寺に至り、赤毛布を敷いた茶店の腰掛に茶を啜つて、愛らしい聲に流るゝ泉を聽き、築山の芝生清さを眺めた時は、自分は忽ち郷里の泉石を憶ひ出すと共に、桂月氏の記したことを「然り」と合點した、自分は郷を去つても、富士山と淺間神社の泉とは常住不斷自分の胸に彫れてある、その彫られてある泉石の風景は、正に水前寺を觀た時、躍如、胸から浮き出て、現前當面に同化冥合の觀を成した。

◎人は當時當處、或美觀に對すると、その美感はもう現實を離れて空想境に往く、現實當面の美觀に對しては必ず或他の相似相縁のものを聯想してやがて往神の感興を得る、自分が水前寺の景を觀た時は唯だ美しい幽邃であるといふの忘我境に入り、忽ち相似相縁の聯想からして、身は羈旅にあるのかはた郷里の淺間湖畔にあるのか

を別たざる刹那の空想境を現じた。

◎滌々と流るゝ泉の聲が、水前寺の境内晴れやかな日光を寫して現在を語る響ではない、どうもそれは自分の少年時代の、赤裸々になつて腰だけ水に浸り、苔滑かな岩の頭に抱きついてビチャ／＼足をはね上げ、同じ腕白氏の水合戦を初め、眼が見えなくなつてどんぶりと、あはや溺れさうになつたのを漸く岸にしがみついて助かり、助かればまた裸體のまま、で岩の上にころりと臥そべつて岩檜を抄り、風流の有無は知らず、石と共に家に持ち歸つて、箱庭を作つて見たその頃の腕白を囁いて居るやうだ、築山の小徑を一廻り歩を移し、流に下つて清冽の水を掬べば、水鏡に映るものは、馬のやうに長い鬚面ひげつらでは無くて、林檎のやうに紅く圓い頬べたのやうに思はれる、わが身は郷に最も遠き時處にあつて、わが心が郷に最も近きを感じたのは、水前寺を觀た時である。

◎水前寺の生命は泉である、泉の清冷である、後樂園栗林公園元より泉無きにあらず噴泉あり飛瀑あり溪谷また趣を成す、しかし水前寺の如く、その泉の清冽玲瓏として源泉混々の趣は見難く、水に活躍の致が見られぬやうである、自分は後樂園の明麗を見た、栗林公園の穩秀を見た、而してその清奇な趣を水前寺に見ることを得た。

◎自分の水前寺觀はこれだけである、他の仔細の見聞は省く、時移つて再び車を急がせ、歸りは矢部川を渡り、上流の翠巒を望み藤肥州の舊事をしのび、更に汽車の直行に、九州山陽を驀地にまた煙の中の人となつた(九州實業新聞に寄す)

岩崎邸の小使

東京高輪なる岩崎彌之助男の邸は、御殿山の一角八つ山の上に石垣高く、樹立登えし大屋敷、前には伊藤侯の住宅であつた、品川の入口の橋手前を西に曲り、石垣に沿うて更に右に曲れば、大いなる門標に「岩崎別邸」と記してある、男爵は此を住宅とする都合で七年餘の計畫で石造の大厦を建築中、邸内は石工の槌鑿の音に喧しく、彫塑家の室、建築事務所等の假小屋がある、土方人足が石や土を運んで居る、

馬の嘶き、鶏の聲がもの古りたる樹の間を漏れて聞ゆ、樹立の茂みから日本作りの屋根が見ゆ、邸といふよりも大なる庭園、大なる庭園といふよりも一の山中かと思はるゝばかりの塵氣無き静かさ寂しさ、林を穿ちゆけば秋草咲き亂れて谿のやうな一區寰に下る、谿を隔てた對面には樹立に五輪の小塔が立ち石燈籠もあり、大なる庭もある、聞けば此處に水を引き、釋迦堂を建てる筈だといふ、足もとに山百合の花一輪、頭を少し傾けて襟あしを人に見せがほ、その美しく塵を隔てた姿は、此處の主人の富の榮華とわが一枝の趣と孰れか優れるといはんばかり、折つてかざしたく思つた情は忽ち消えて、あはれ天然の花、自然の榮華、人の富は何にても無しとの理を言ならで示したる花のけだかさにかしこみ、翻つて富は自然を破壊することであると同時に、その用ひかたでまた斯く自然を培養し、自然に自由に榮華を與ふるかなと觀ず。

地ならしをなしたつゝあるバタ製造所、家畜の牛乳の餘裕でつくるための特設備、土を運び居る男の話に、「この處の御普請が一坪四百圓もかゝるのださうでございま

す」といふ、石塀を繞らした煉瓦造の一構、小さきくくり戸を開いて中に入れば、此處は厩、一方は糶秣場、馬車小屋に隣り、塵もといゆぬ三室に三頭の太く逞しき馬の姿、昂然として食には飽いた風がある、その隣が看守の人々の室、二階の楷梯が見え、奥まつて土間を隔て、疊が見える、その右の方が一かまへの家禽場。

家禽場は二つあり、一つは大きなばかりで規模も更に大きいさうであるが、此處には二三の親鶏、七面鳥の數羽の外には、孰れも小さいのばかり、最も小さき、清少納言に美しさもの愛らしきものと言はれた雛の群は、特に飼養法の正則に従つた鐵網かけた雞箱に居る、その數五六十羽、箱の大きさも相應に、例の寢床がある、砂が敷いてある、寢床と運動場との間には往來交通の圓窓がある、寢床には戸張の垂がある、家根の形も箱の周圍も人家の模型と言ふも可いほどの完備さ、さし寄つて上からのぞけば、小さき群は一齊に集り來る、その他の中では、廣場を逍遙して得々然、漣波ブリマウスロック、レグホーン、ウーダン、プラマ、コーチン、ハンパーク、アンダルシヤンの諸種類未だ雌とも雄とも識れざる族が、何を求むるとも

無く、遊んで居る、何を聞きつけたか見たか、一羽のやゝ大いなるが、羽ひろげて颯と馳せゆけば、他の群一齊にそれに従つて走る、後見送るのでも無く、胸の毛を毳のやうにふくらかし、とさかを紫陽花色に變へた七面鳥が、忽ち翼を縮めて一聲高く叫ぶ、日は今亭午、静かなこと里を離れた一軒家に、唯だ雞どもとばかり生活して居るやうな心地、われは佇立んだまゝ、少時彼等の開かさに見はれて居たが、同伴が一足石登を踏んだ音に気がついた、やはり此處は、岩崎彌之助といふ富豪の家禽場である。

石堀のくゞり戸を出で、樹立の傍に沿うて行けば、一面開けた處に玻璃の家玻璃の窓の白き光目ばゆき五六の小舎、名高い大隈伯庭のに優るとも劣らぬ温室がある、石登は左右中央に路を備へ、第一室は草花の珍らかなの、五彩綾に咲き、第二室は葡萄、露を帯びた果實が緑玉を綴つたやう、第三室は桃、これも青葉がくれに實を見せて居る、その他の室も或は草、或は樹、孰れも榮え、室の外には撫子、石竹、堇などの鉢が、今しも温室掛の手から如露の恩澤を受けて居る、見來れば雞群はさ

ながらお坊ちやんのやうに養はれ、花卉は正しく深窓の佳人として侍かれる有様、天然を人爲に籠絡してある。

温室を見て建築に至れば、見上ぐるばかりの大厦ははや一階だけは竣功し今は階樓に着手して居る、同伴はこれが蒸汽風呂場、これが圖書室、玄關、居室、厨房と説明してくれる、われには唯だその御影石の建築の壯大なるを注意したばかり、しかも此大なる建築の勞作に使はるゝ人夫の一部であらう、假小屋の傍の煉瓦層をろく石の處の薦の上に、つぎはぎの衣服草鞋脚絆の姿、脱いだ菅笠を膝にあて、腰を下した三十ばかりの女が目についた、傍にはその子として相應しい汚い姿の七つばかりと十ばかりとの二人の兒童が戯れて居る、彼等の胃の腑は、別に此大建築の家の主人のとその大きさが異つては居ないらしい、血は通つて居る、息は通つて居る、手足は動いて居る。

家禽場、温室、建築中の石厦石樓、恰も山中に在るに似たる庭園、これが日本の富豪岩崎男の未成住宅であることを見たわれは、再び同伴と共に事務所に戻り、小使の汲

んで出す番茶に咽を潤して、茲に小使の慷慨談を聽得たのである。

此事務所は建築中臨時に設けられたもので晝は掛の人々で賑はしいが、夜は小使のわび住居、草間に集く蟲の聲を聞いたとて、樹影を描く月の光を眺めたとて、別に興があるとは思はぬ、寧ろ寂しさが増すばかり、さりとて御前さまのやうに、馬車に乗つたり、若様のやうに築山蔭に土俵作つて力士呼んで来て角力の遊びに興がつたり、さはなくとも京都の加納とやらいふ人のやうに、毎日椅子に腰かけたばかり、杖の頭で庭づくりの指揮をしてそれで日給が六十圓といふ大金を取つて見たり、其様な立派なことは夢にも思はぬ、風流も知らぬ、榮華も欲しくない、小使の毎夜の樂みは唯だ是一つ、それは本宅から事務所に通じてある電話のかゝるのである、その電話も、御馳走の出たお客さまの歸つた後にかゝる電話である、何故にその電話が樂みか、それはこの電話が大なる福音を小使に齎すからである、電話口に耳を寄せ、厨の女中がやさしい聲で、お下りがあるから取りにお出でといふ、それを聽いて小使の顔はにつこりと相がくづれる、いそぐと出て行く、珍珠佳肴の残りもの皿に堆きまで頂戴

する、小使喜んで事務所に持歸り、少しはまいる酒の肴、五十の飯は越えても^な滋いものは滋く食へて満腹して寝るのが何よりの極樂淨土、外に望みは無いのが小使の理想なり運命なり、されば本宅に客がある、饗應がある、その後には小使に電話の福音が聞える、残りもの頂戴にまかり出るといふのが、殆ど慣例になつて居た、彼小使と住宅の客の饗應とは全く大切な關係であつて、言はば岩崎邸の客はその饗應の膳羞を多く残して置だけそれだけ彼小使へ恩惠を多くする次第であつた。

さるほどにさてもその後の或日、表門には馬車の音高く轆り、やんど無き側の客があるといふので、小使はその夕暮を待ちわびて居たが、例の電話はかゝらぬ、情報を探つて見れば、御馳走は正しく山海の珍珠佳肴が出たといふことである、客は歸つたとのことである、けれども電話の沙汰は竟に無くてその日の望みもそらだのためとなつたのである、翌日更に情報を探らんと思ふほどに、男爵が夫人と共に家禽場に來り附の女中の姿も見ゆる、何事かと聞けば、こはそも如何に、昨日小使の望み居たる珍珠佳肴のあまりものは、夫人侍女等の手にて仔細に按配調理され、全く家禽

の餌となつたのである、男爵及夫人は獨り常用雞卵を得るためのみならず、また娯樂としても家禽を愛養するのであるから、時々家禽場を訪れては無心に遊ぶ雞群の様を観て樂む、しかも或動機は彼等に餘餘を興へるのが一の樂であることを感せしめたものと見える、小使の獨占のやうに思て居た特權は、やがて全く家禽の群に移されて了ひ、それよりして小使の耳にこの福音ある電話はかゝらぬこととなつた。主人方は家禽飼養に一つの消閑法を加へ富豪生活の樂を増すと同時に、小使の方では常住座臥勞作に是從ふ小使生活の殆ど唯一の樂としたおあま頂戴の目的を失つた、持てるものは更にその持てるものを増し、持たぬものは偶々得たるものをも失ふとは斯んなことか。

その後家禽は一層肥え成長しやがてその産む卵を主人の膳に上すであらう、日給六十圓の加納某も椅子にかけて庭づくり、彼のつぎはぎの衣服着た母子は毎日働き、温室の花は開いてまた落ち、時の移りゆくにつけても、一時樂を失つた彼の小使は如何したらうか、更に別に樂む處を得たであらうか。(三十八年八月)

寒霞溪

(一) 寒霞溪の別寢區

「對面に淡如^{うすごと}と高い峯の見えますのが、小豆島の星城山、その山の左が名高い寒霞溪でござります」と茶店の婆が語るを聽き、處は讚岐津田の松原、松の根に踞り、静波磯に私語きて沙を淘ぐる海景色を眺めながら、鷗心類に浪に誘はれ、さらばと、志度浦に至り、帆かけし船を賃せんとす、生憎に風急に海若穩かならざりし連日の餘勢未だ歇まず、蓬窓の夢結び得べくもなければ仙境に到り難しと漁家の話に望を失ひ、そのまゝ機會無くて過ぎしは殆ど四年となりぬ、去年十一月、紅葉の好時節に際し恰も閑を得て宿昔の望を果して寒霞溪に遊び、加之此溪山中、「寒霞溪道しるべ」(寒霞溪山麓中洞絢海著)に記しありながらなほ世に多く知られず名さへ未だ命せられざる別寢區を探り得たるは、煙霞の縁われに淺からざるを歎びぬ、蓋し溪山の

面目は、人に傳へらるゝ多きも人に踏まるゝなほ少き時に於て、最もよく其真を見得べきが故に、此時と處とを得たるはわが幸とする所なればなり。

寒霞溪の勝境が世に顯れしは、天保二年貫名海屋が杜少陵の詩に因みて浣花溪の名を當てたるを初とし、その之を廣く傳へ紹介したるは、明治二年成島柳北翁の遊記(黄薇紀行)なるべく、その名の寒霞溪として用ひらるゝに至りしは、藤澤南岳翁の命じたるに起れりとぞ、爾來騷人の遊蹤年々に増し、保勝會も設けられ、紅雲亭、錦屏風等十三景の名世に布き寫真版にさへ刷られあるものから、なほ仔細に探討し紹介せるもの少きは、要するに交通の便ならぬ爲なるべし、東の妙義、金洞、西の耶馬溪はいふに及ばず、甲州の昇仙峽も鐵路山近くに通じて遊蹤繁くなれるに反し、寒霞溪は此等と互に奇勝の長短を較べながら、獨り海上の島中にあればなるべし。

數年前より山陽鐵道が四國聯絡船の便を開きて特に寒霞溪探勝客の爲に施設する所あり、岡山より京橋發の小蒸氣船にて朝日川を海に下り、三幡といふ處より聯絡船に駕りて、小豆島の土庄に上陸し、此處より四里程にして寒霞溪の麓に達す、此道は平

坦にして人車頻繁、風光また佳なる處多し、別に大阪より高松より汽船の便元より無きに非ず、殊に寒霞溪近き内海灣に達するものなれば、土庄に上陸するよりは近けれども、但だ此方面の航路は寄泊の地多くして定期の間隔長きが故になほ山陽の聯絡船に依るを好しとせん、わが遊程もまた此便を取れり。

時は十一月の九日なり、大阪夜發の汽車にて岡山に至り、汽船土庄に着き、土庄より半ば車し半ば歩いて、秋深の景を賞でながら同伴者清水怪石と共に寒霞溪山麓の草壁村の旗亭に入りたるは翌日午後一時過、腹したゝめ盃中のもの少しまいりて案内者を備ふ、われは世に聞えたる十三景を後にし、先づ未だ聞えざる西の勝に至らんと思へばなり、手織木綿に小倉帯締めたる卑しからぬ四十男、袴はしをりて案内に出立ち、西の谷は十年以來遊べるもの殆ど鮮し、されば荆棘道を没し僅に樵徑を尋ねて往き得べきのみと言ふ。

わが遊の望む所は是なり、わが寒霞溪の別寰區といふものは是なり。

(二) 西の谷

寒霞溪の麓より仰ぎ見れば、所謂寒霞溪の勝境は直に見えずして、却て此西の谷即ち鞍懸の峯巒宛然天に懸けたる錦屏の如きを左方の前面に望む、此麓に来るもの直にこれを寒霞溪の全景と見做し、實は此處を外に見て寒霞溪を觀了したりとなし、この勝境の更に見るべきあるを等閑視するなるべし、われ等は本道の遊仙橋を渡り、妙見山の森の後より西北に小徑をたどる、杖頭に紅雲を拂ひ帽廂に綺霞を駭かす、歩々皆既に秋錦の裡を行くなり、仰げば西の谷の全景、正に一幅の唐畫を展べたらんもの奇峯怪巒いよゝ近づきていよゝ活く、登攀一里許、漸く奇峰の下に達す、此間の路頗る峻なるも、満目の錦繡、當面の大巖壁と相顧みて海山の風光あるがために、疲勞を感せんよりは眺矚の興多し。

先づ眼を奪ひたるは、鐵鏽の如き大絶壁、天に聳え、深紅を染めたる萬巖、峻に懸けたる、壁上の美觀なり、巖層は横さまに石理を描かれたる、宛然羅馬古城圖なり、

嚮導に名を問へば、未だ名あらずといふ、私に命じて古城壁と稱す、古城壁のある處は、俗に流れ岳と總稱し、其西南に屹然として大蝦蟆の天を仰ぎたる様なるを又七ヶ岳といひ、其次を尖り嶽、西端を塔の穴と呼び、此四嶽を併せて寒霞溪の西の谷と總稱す。

(三) 流れ岳の美觀

古城壁を初めとして西の谷の奇勝は流れ岳に最も多く、紅葉の美觀もまた絶倫なり、壁の右方に亘りたる斷崖奇岩は、その裾五彩燦爛として皆巨人が雲霞を踏むに似たり、そを織れる樹々は錦木(黄)を最多として楓、野葛、桐、榎、櫻、犬麥等の叢の中に樅、松、扶移、榊、茱萸、杉等を點綴し、その色彩は、深紅、淡紅、黄紅、茜、蒼色、褐色、おりーぶ、茶色あり、黄色あり、鮮血の如き薰棗の如き、總じて紅に因める色々が、日光に映發して錯綜し披拂し參差搖綴して落々紛々、かぐつちの火の神を斬りたる血たばしりて磐を裂き石を裂き樹を裂き、光焰萬丈天を裂かんとした

る飛沫が千山に敷き千壑に散りたるならんか、山つみ、野つち、狭つち、狭ざり、
 關戸、久々のちの神々が、あらゆる天の絲、天の布の敷を盡して此處に集めたる
 か、山姫の笑みし氣息に凝りて無縫一面、雲霞の衣を装ひたるか、青緑に因める色
 色を渲染したる美觀大觀、これを凝視すれば、色毎に躍り閃き、箇々靈ありて言は
 んと欲す、陸離たる光彩やがて浮動し、やがて一齊に萬層の雲となりて膽を奪ひ胸
 を蓋かす、色彩の美に加ふるに劈立千仞奇巖の壯觀あり、絢爛と雄渾と併得たる景
 中の人、唯だ「絶景」の一語あるのみ。

嚮導いふ、寒霞溪の本境を初め此邊の山皆民有に屬するが故に地主の如何に因りて
 伐木に疎密あり、むげに伐りたる跡は錦繡空しく絶ゆるもあれど、此流れ岳は、山
 奥の大山某の有にして、五六十年來、斧斤を容れざれば、樹林かく茂りて秋錦の美
 もまたかく多し、これほどの美觀は、錦屏風、紅雲亭にも殆ど無しと。

(四) 蝙蝠洞と嘯虎巖

紫紅綠黃の錦を披きて、われ等はまた岩を踏み石を攀づれば、帽を壓する大巖峭立
 し、前面を遮りて路無きかと疑はれ、少しく曲折すればまた間地あり、また峻巖あ
 り、忽ち見る峻巖の下、別に一座の大巖石ありて其下更に窟を成し、洞巖屋の如く
 さし出である處二間許、洞奥七八間、磊砢の石狼藉し、藓苔蒸し青みて衣を染めん
 とし、寒風しのびやかに自から面を吹く、此洞近き頃までは蝙蝠多く住みたりとて
 蝙蝠洞の名あり、洞を過りて頭上にはや落ちんかと思ゆる大巖、横さまにその頭
 を出し、しかも將に天を仰がんとす、恰も是虎の嶋を負ひ谷に嘯くに似たり、嘯虎
 巖と名けんは相應しからん、此邊の巖石皆突怒偃蹇、姿態争うて奇を呈し、嶽然、
 衝然、角列し、累積し、小蟾蜍巖、小玉筍峰、小荷葉嶽と名くべきもの少からず、
 峻々たる路を攀ちて登り盡したる處は、所謂鞍懸の絶頂なり。

絶頂に數歩を餘す處にて來路を俯瞰したる風光はまた言説の外に在り、蓋し寒霞溪

山が、妙義金洞、耶馬溪、昇仙峽の三勝に比して、誇れるものは、山の奇を以て海の大景を併得たる處にあるべし、さればその絶巔平蕪の四望頂に立てるものは何人も寒霞溪の勝たるに點頭す、この鞍懸の眺矚は四望頂に譲らず、絶壁斷巖兩方より相逼りて千仞を劈きたる間より内海灣の神女島其他の小峽を眼下に見、海を隔て、阿波の峰巒を雲烟の中に淡く望み、島端なる坂手の隼、洞雲の二峯は、戟を擧げて提するに似たり、閘戸の谷より此處に來り、巖の扉を左右に擁したる觀は、正しく天の岩戸を開きて天地初めて明らかなるが如し。

絶頂は一望平蕪、雜樹だに無し、谷遠く山深く、また來路の奇岩怪石を見ず、山容さながらその身にかゝる奇勝ありて人を駭かしたるを知らぬがほなり、此處瓢酒を酌むに好し、枕席するに好し、四顧寥廓たる中に野綠をさしまねき天碧を仰ぎ、靜に神と謀り心と謀るの氣味は、限無く深し。

(五) 西石門と呼猿洞

鞍懸の絶頂、烟に叢り露に穿てる寒蕪に席して、來路巖壑の蒼突秀鋌を憶へば、夢の如し、彼の雄偉怪奇、われ等これを仰ぎて自然の臣僚となり、此清空平遠、われ等これに臥して自然の兒童となる、彼には敬虔の念生じ、此には安定の觀をなす、天衣無縫なる自然の剪裁といふべきか。

之を聴けば靜遠にわたりて韻あるも、之を視れば虚空に吹きて痕無き天風、冷然として衣を透すを覺え、やがて此境を去り、窓路といふに下りて石門洞窟の勝を見る。われ等今劈立の巖頭に立ちぬ、嚮導いふ、徑殆ど絶ゆ、十年來人跡稀なるがためなりと周旋探討、腰なる利鎌を揮つて荆棘を切り、手を傷けて雜樹を排し、枯草の伏したるを除きて、漸く發見したりけん、路あり路ありと叫びて先づに、その後まごみちに跟かきて下る、藤竹袖を奪ひ鋪巖足を噛む絶壁斷崖を縫ひたる小徑、窓路の縁かと呼なぶるも宜なり、われ等の身は樹竹叢中に没して四面を見ず、唯だ嚮導の頭黒さを望みて

たどるのみ、叢樹盡きて巖壁現はれ、纏繞せる深紅の葛籬、豹斑たる白緑の苔蘚、彼此相映じて巖面を飾り、草茵に一境を開きたる處に出づ、右を仰げば大石門、左を顧みれば大巖洞なり。

石門は高さ三四丈幅四五丈、巖は水成質の斑縞岩とやいふべき、灰白色の肌にして赤斑を點す、石と相打ちて磊塊を削ぐべし、眞箇に風雨の斧に土精を鑿開し、霜嵐の刃に地骨を刻露せるもの、洞然として門を成す、左は自からなる大圓柱、右は直に巨巖重疊して壯聳環列す、門柱に小穴あり小祠を安置す、穹窿宇を成して雨風を支ふべく、門頭より石泉の雫滴り落つるは、仙液靈漿掬するに堪ふ、總して石門の岩壁には、石檜一面に繡錯し、小豆色なす花を着けし錢蘿、寒香を吹く幽蘭、微薰を帯べる石斛等その間に交絡點綴す、更に門を透して下界を眺むれば、山往き海浮ぶ。

翻つて大巖洞を見れば、此處は前に流岳に見たる古城壁、蝙蝠洞等の反面にして、劈立したる障壁の腰を穿てるなり、洞口二三間、高さ三四丈、同じく石檜の黛青、葛籬の臙脂を染め、洞内暗々として陰晦入るべからず、嚮導いふ、洞の深さ約六七十間、

曾て入りしものありと傳ふるのみにて今入らんとするものだに無し、わが幼き頃は猿公此邊に最も多かりき、定めて彼等安住したる處なるべしと、荆棘を排し洞口に臨みて試に石を洞中に投ずれば、沈々として聲を聞かず、仙洞とはこれをやいふべき、此邊の紅葉また甚だ多く、洞口は墨より黒く、檜青蘿碧葛籬と相配して美し、洞を私稱して呼猿洞といふ、呼猿洞の右方に高く、恰も庚申山にありといふ胎内潜の如き三洞相ならびたるあり、各圓くして魔の眼の如し、名けて三星洞といふ。樹林禽聲多し、錦織る山姫の侍童かと思はる鷓、時に磔々時に囁々、深樹の裡より空にわたるその聲さながら人を呼び併せて山靈に告ぐ、忙しく呼ぶかと思ふほどに忽ち斷續の私語を弄する繡眼兒、樵路葛籬を物色し自然に得たる消息を谷より谷に傳令する畫眉鳥を初め、四十雀のわれはがほに饒舌せる、藪鶯の黙して枝を轉せるなど皆山姫の機梭に調子を和する律呂なり。

(六) 時雨の溪山

禽聲を聽いて山いよ、幽寂なる、嵐氣衣を濕し山風颯として動く、靜寂最も極る處動機やがて來らんと欲するの觀あり、怪石は帖を出して寫生に凝り、嚮導はわが需に依りて石檜を採り巖塊を剝ぎ櫻楓の杖とし得んものを伐る、齊しく一語無し、われは且つ冥想し、默契を自然に得んとす、忽ち巖頭に霧あり、蓬々として合して雲と成る、仰げば日の光何時しか淡れたり、天は雲の脚忙はし、倏忽として風來る、滿目のもの皆動く、衆草を掩冉し、枯葉を旋轉し、紅亂れ綠颯り、樹として鳴らざる無き疾風となる、亂雲動くこと更に急に、白雨大に至る、千珠萬珠巖頭に跳り幘壁に散り、直に注いで紅樹黃林にわたれば、萬顆の瑪瑙齊しく碎け琥珀飛びて、風雨一山を搖蕩す、天地は今正に戦ふなり、巍然として頭角漆よりも黒く、中空に立ちて此戦を睥睨するは奇峯怪巒なり、三個の客は石門に立ちて之を觀る時、寒霞溪の中より渦き出でたる一團の奔雲、亂れては集り裂けては合し、山を羅し谷を蔽うて來る、

正に是あらゆる溪山の靈、泉石の仙が、白馬に乗り白袍を着、白旗を翻し、白兜を冠し、槍を執り戟を擧げ、雨師風伯を驅りて塵界に殺到するにやあらん、その雲の五百重たつ浪千重巻く渦なして紛々としてわが袖を襲ひ、その仙の人は、相列して麻の如く隙間も無き一陣の氣息となりて千びきの岩をもとびはら、かさんとす、李白が「天姥吟」に歌へるが如く、忽ち魂悸きて魄動き、恍惚して神を凄うし骨を寒うし、遽然として悄愴の氣迫り來る、われは期せずして自然靈妙の機に參じ得たり。風雨容易に罷まず、日暮れんとす、竟に嚮導を促して山を下るに、路全く無し、唯だまた前路と同じく黃箭を拂ひ寒荊を披き、身を没し俯して進むのみ、帽廂に溜れる雨は襟に亂下し、脚下の石滑かにして數次轉倒す、風雨の路と奮闘すること約半時間、漸く樵徑を得たり、「寒霞溪道しるべ」に「石門をくわりて麓なる本道に出づべし」とあるその本道に至るまでの路は、路とはいふべからざる樹叢荊棘なりと知るべし。

西の谷の勝境は以上に盡さず、尖岳、又七岳のまた更に西南に訪ふべきもの少から

す、其最なるを塔の穴とす、一箇大巖柱、陰々たる大洞壁に直立し、蛟龍の天に朝するに似たるものあり、蒼龍窟と稱すべし、こは西の谷に至る路にて髣髴望み得、われ等は雨の黄昏に際し、尋ねて此處に至らざりしを憾む。

此夜上村の旗亭秋錦館に歸り、寒霞溪山の保勝を以て殆ど命とする中桐絢海翁を訪はんと欲したれど、前夜車船に睡足らずして濟勝に勞せしため、錢湯の一浴に四肢綿の如くなりて困臥の夢に入りぬ。

(七) 東の谷と東石門

翌日は即ち寒霞溪を見るべく前日の嚮導を備ひ、怪石と共に發し、遊僊橋を渡り、嚮導の言に任せ轉じて先づ寒霞溪の裏山即ち東の谷に向ふ、こは星城山に至る道なり、茂林鬱樹の裡を十餘町往き、溪流を渡れば剗然たる池あり、池の處に立ちて南を仰げば、鋪巖屹として峯をなし壁をなす、佛岳の勝是なり、更に進めば奇峯蒼突の下、別に兩箇の怪巖溪に臨みて立つ、右なるは螺髻を戴きて洋装したる佳人おの

が姿を顧みて嫣然一笑の態あり、左なるはや、低く、老婢が佳人を仰ぎて吩咐を待つに似たり、名けて雙女峯といふ、佳人の裾に洞あり、小祠を祀る、佳人の肩、腰、老婢の頭、脊等紅樹黃葉なり、別に不動巖あり、雙女の中間にして遙か高さ處に聳ゆ、不動巖より岩勢走りて西に低る、處、また錦繡を鋪きて山骨爛斑たり、之を過ぎて溪流淙然たる處小徑二途に岐る、洞の川といふ、左すれば四望頂の背後に出づべく、右すれば二三町にして東の石門の全景を見るべし、われ等は先づ右してその全景に對す。

大石門は洞然として東西に貫かる、東は溪に臨み西は四望頂路に傍ふ、西石門に比すればや、小なれど、洞底に溪流あるをもて別様の趣あり、巖は石檜、秋蘭、石斛寄生して姿態を裝ふ、西石門に比して紅蘿の剪裁見えざるのみ、巖障の腹壁に楮樹數株鬱然緑を染む、若これを老杉洞に配すれば老楮洞の名を得べし、洞門より北にわたりて斧もて削れる如き一帶の障壁豁然たる大小の幽洞あり、皆怪奇を稱ふべし、洞壁深然たる一境、流に沿ひて楓樹多く、櫻、椿、楝棠、櫟、天竺桂、柘等交錯す、

楓樹のこれほどなるは此溪山を通じて他に見ざる所なれども、その境が洞底にして眺望少く、日に背きたるため、紅葉の美自から乏しさを惜むべしとす、但だ洞に聲あり、風来りて満樹を振ふ時、落紅水に點するの光景は獨得の處なり。

東石門を見了り、轉じて前の裏山路に返り、羊腸の坂路を登ること二十分程にして塔の石に達す、烏帽子様の石を載せたる一基の奇巖、一座の大巖上に在り、海山の風光此許一眸に收り俯視すれば眼中の山色皆紅黃、これより一丘を攀ぢて四望頂に至る、頂に至るの前、黃草茫々の一境あり、之を北上せば星城山に登るべし。

(八) 寒霞溪の全景

四望頂燕翁の句碑の邊より下瞰したる寒霞溪は、絶壁の藤蘿、斷巖の紅黃樹、深谷にわたり淺溪を蔽ひ、樹の奥に樹あり、巖の下に巖あり、蓬然として極なきの趣あり、その海山を一併に大觀し、自然の形貌の奇と色彩の美とを對照し視得るは絶倫の境といふべし、四望頂を下れば女羅壁なり、青衣碧裝、獨り萬紅の中に別種の觀

をしめす、烏帽岩の突々空を刺したる、荷葉岳の濃抹淡粧一幅の彩箋を展べたる、層雲壇の谿銜石相接し層々雲を浮べたる、畫帖石の幽澗に人外の奇文を錄せる、玉筍峯、蟾蜍巖のさながら互に朝天を競ふが如く對立したる、老杉洞の東西石門の中樞として仙寰を現はしたる、錦屏風、紅雲亭の左右より溪山の關門を擁しがはなる、絲麵澗の霜樹に配して玲瓏の水を練りたる、通天窓の天上の衆仙來りて此處より勝境をひそかに窺ふに供したる、數へ來れば十三景、皆既に世に紹介せられたる處なれば、今敢て絮説せず。

顧みて此等歩々奇趣横溢するの勝境の所以を思ふに、その美は趣致の綜合にあり、これを西の谷に比すれば、彼が紅葉に富み巖洞の奇怪に富みたるをもてしてもなほ多く聞えざるは、この綜合の奇趣に於て比較的乏しければなるべし、但だ夫れ西の谷は、寒霞溪山の面目をして、妙義金洞、耶馬溪、昇仙峽等と其海内の勝境たるを併稱せしむる上に於て、必ず逸すべからざる別寰區たるを忘るべからず。

されば寒霞溪に遊ばんものは、先づ西の谷を觀、而して後途を寒霞溪本道に取りて

其諸勝を仰視しつゝ、歩々に奇趣の變化を賞して四望頂に達し、此より右折して裏山に下り東の谷を見て山麓に返るを便にして且つ佳なりとす、わが遊は去年にあり、しかもなほ再遊を他日期せんと欲す、紅葉黄花の節正に來り、寒霞溪山は遊蹤漸く増さんとす、都門の塵土萬丈の裡にこの溪山の歡會を懐ひて雲心頻に動くもの獨りわれのみならざらんか。(三十七年十一月)

子守歌

『ねんく、ころく、ねんころよ、保母が歌ふにねんねしな』。

時は夜、齡は十三になる子守女ウナルカは、小兒の寢て居る搖籃を揺りながら、殆ど聞えぬほど低い聲に歌ふ。

偶像の前には青燈輝き、壁より壁に室を横さまに小兒の衣服、大きな黒袴の對を掛けた衣桁綱が渡つて居る、燈の上の天井には大きな緑の輪光が印され、小兒の衣服と袴とは、籠にも搖籃にもウナルカの上にも、その長い影を投げて居る、……燈がゆら

ぐ時、天井の輪と影とは繪のやうに揺く、息の止るやうに静な處に石輪と靴との香がする。

小兒は叫ぶ、叫んでから嘔聲に弱くなるまで長い間で、しかもなほ叫ぶ、かゝる時誰か愉快だと言得るものがあらうか、ウナルカは睡たいのであるその臉は垂み、頭は傾き、頭は痛む、漸くに臉と口とを動かす、自分の身になつては顔が萎びて堅くなり、頭は針の頭ほどに縮まつたやうに思ふがなほ囁くやうに、

『ねんく、ころく、ねんころよ、守が歌ふに寢んねしな』。

籠の裡には蟋蟀がちいと啼く、戸を隔てた次の室には主人と旅人のアタナシエースとが寢て居る、搖籃は力無げに軋む、その二つの聲は、うまく子守歌に調和して臥床に寢て居るもの、耳には心快い、しかし今この奏樂は唯だいらく荒むばかりとなつた、そは睡らうとするからで、また睡ることが出來ぬからである。

此家には睡眠禁制のウナルカが、若し睡るといふことになれば、主人夫婦は彼女を打であらう。

燈はゆらめく、緑の輪と影とは揺いて、ウアルカの半分開いて動かぬ眼にかざす。彼女の半分醒めて居る頭腦の中には、不思議な影象が見えるのである。

空にたなびいて浮飾に重なるやうな黒雲が見える、それが小兒のやうに叫ぶ、その時風が吹くと思ふと雲が消える、やがてまた流れるやうな泥一杯の道路が見える、路には荷車が擴がつて、脊に小鞆を負つた男が居る、影が彼方此方に動く、一方には冷く濃い霧を透して小丘が見える、忽ち小鞆の男と影とが、泥土の中に潰れた、ウアルカは問ふ「これは如何いふ理由か」答がいふ「睡るの、く」それで彼等は深く睡り愉快に眠ると、電信線の上に鴉が棲つて、小兒のやうに叫び、彼等を起さうとする。

「ねんく、ころく、ねんころよー、守が歌ふにねんねしな」と囁きながら、今ウアルカは、暗く寂しい室の裡に、自分の身の上を見るのである。

床の上に横になつて居るのは、死んだ父だ、それを見ることは出来ぬが、轉りながら呻く聲は聞える、父が自分で言ふ「ヘルニアに憑かれた」ので、苦痛は言葉が出

ぬほど激しい、唯だ呼吸の息づかひが、唇を漏るゝ時、「うー、うー、うー」と響くばかりだ。

母のペラゲヤは、爺が死ぬといふを庄家の旦那に報知に往つて程が経ても歸りさうにない、ウアルカは爐の處に居て父の呻く聲を聞いて居ると誰か室の戸に車を着けた、それは庄家に客に來た醫師が來診したのである、醫師は小屋に入つたけれども暗くて見えぬので「燈火を持って來んか」と言ふ。

父のステパノフは「うー、うー、うー」と呻く、歸つて來た母は、爐の處に燐寸を探す、少時は無言、やがて醫師の夾囊から燐寸が出て燈が點いた「直に、直に」と叫んだ母は室から驅出すと間もなく蠟燭を持って來た。

ステパノフの頬は、燃えるやう、眼は輝いて物を衝透すやう、醫師と壁とを貫いて對面が見えるかと思ふばかり。

「如何したのですか、あゝ、大分長く斯ういふ容體でしたかな」。

「何ですか、有難うございますが、もう死ぬ時か参りました、……私はもう助かり

まませぬ』。

『馬鹿なことを、……必度醫^{なほ}してあげろ！』。

『どうぞ宜しく、わりがたうござります、……しかし諦めて居ります、……死なねばならぬことならば死なねばなりません……』。

半時間ほど病人を診てから、醫師は起上り、『もう私では及ばんから……病院に入らなけりやいかん、彼方で能く診てくれるだらう、……直に行かなけりやならん！、もう遅いから病院でも寝ただらうが、……なに心配することはない、私が手紙を與らう……汝聴くかな？』。

母は問ふ、『先生、如何致して病院へ参られませう、私等馬もありません。』。

『決して心配することはない、私が旦那に話して借りてやらう』。

醫師は去る、燈火が消える、ウァルカはまたも父の『うー、うー、うー』を聴く、半時間ほど経つと誰か來た、それは父が病院に行くべき車である、……父は仕度をして、而して往く。

今、清らかに麗らかな朝となる、母ペラゲヤは家に居らぬ、父の容體如何にと病院に行つたのである……小兒が泣いて居る、ウァルカは自分の聲で誰か歌ふのを聴く、『ねんく、ころく、ねんころよ、守は歌ふにねんねしな……』。

母ペラゲヤは歸り、其處に倒れて低語く、『昨夜少し好かつたけれど、今朝もう到頭天國に往かつしやつたよ、……手遅れになつたのださうで、今少し早かつたら好かつたのに……』。

ウァルカは森の中に行つて泣いた、忽ち誰か、彼女の額が赤楊に鉢合をしたほどの強い力で頸首の上を打つたものがある、頭を舉げて見れば、彼女の前に、靴師なる主人が立て居たのである。

『何をして居るのか、痴女め……小兒は泣いてるのに、汝は睡て居る。』

まどろむと思ふ間もなく荒らかに喚醒した主人はやにはにウァルカの耳の邊を平手打ちにした、彼女はその頭を震ひ、前のやうに搖籃を揺り、前のやうに子守歌を呻く、天井なる緑の燈光、衣桁なる袴襦袴の陰影が戦くかと思つると暗く彼女の前に翳さ

れて、忽ち再び彼女の頭脳に憑いた、再び流れるやうな泥土だらけの路が見える、背に小囊負ふた人々、その影は寝て熟睡する、彼等の此様を見ると、ウァルカは如何にも睡くて堪らない、嬉しさに寝やうとすれば、母ペラゲヤが傍に来て促き立てる伴れ立つて市へ仕事を求めに行くのである。

「どうぞお慈悲に一文戴かして下さい、お慈悲でござります、旦那さま」と逢ふ人毎に憫を訴ふるは彼女の母の聲。

忽ち「坊をおわたし」と能く聞馴れた聲がする、續いて「坊をおわたしつて言へば」と、同じ聲が繰返され、しかも今度は怒つた鋭い調子で「睡つて居るんだね畜生！」。ウァルカは跳起き自分ながら何處に居るのかと四顧せば、在りし路も無い、母も居ない、小囊の人々も見えない、唯だ室の中央に、小兒に乳を給りに來た主婦が立て居るのである、肥つた肩の廣い此婦が小兒に乳を與つて和して居る間、ウァルカはそれを視ながら静に立つて、了むまで待つて居る。

やがて窓外の空は青みわたり、物の影薄れ、天井の燈光白くなりゆき、もう朝に間は

無い、主婦は寝衣の胸を合せながら「さあ渡すよ、泣いてるから、氣を注げないと聽かないよ」。

ウァルカは小兒を受取り、搖籃に置き、また搖動を初める、影も縁の陰翳も消えたゆゑ、今はその頭腦を誘ふものは無いが、依然として睡い、心から睡くてならない、搖籃の端に頭をつけ、睡魔を追拂ふやうに身體で籃を揺つて見たが、再び臉は垂れる、頭は重くなつた。

「ウァルカ、竈を焚け」戸の後から主人の聲が鳴るこれはもう起る時が來たので、その日の業が初まるのである、ウァルカは搖籃を措いて小舎に薪を取りに走る、彼女は快活になつた、走るとか歩むとかする時には、坐つて居る時のやうに悪く睡いとは思はぬのである、薪を持ち來て竈を焚く、而して後に彼女の石のやうに固くなつた顔が醒め、暗くなつた心地が生々と晴れたかを感じたのである。

「ウァルカ、茶釜を準備しな！」主婦が呼ぶ。

薪の小片を切つて漸く焚きつけたと思ふと直に次の吩咐がこれである。

「ウァルカ、店の靴を磨いて置かー!」

床に坐つて靴を磨く、するとまた大きな深い靴の中に頭を容れて一寸その中で睡つたらば如何に愉快であらうかなどと思ふ、……忽ち靴が大きくなる膨脹する、室一杯になつた、ウァルカはブラッシュを落したが、直に頭を揺つて眼を睜り、けるりとして端然として見た。

「ウァルカ、階段を拭いて置き……お客さまに失禮になつてはならない!」

ウァルカは階段を潔にする、室を掃く、それから他の竈を焚く、店に走る、眼がまはるやうに仕事は澤山ある、少しも自由は無い。

けれども臺所の食卓で薯の皮を剝く時ほど退屈な事は無い、ウァルカの頭は卓の上に垂下る、薯が眼に着く、庖刀が手から落る、傍には肥つた怒りっぽい主婦が逼壓しあげた袖に、忙しく働きながら、ウァルカの耳に鳴るやうな聲で話す、食卓に侍くこと、洗濯すること、裁縫することもまた苦痛である、もう何が何にならうと關はぬ一切抛り出して、床の上に轉乎となつて睡たいと思ふ時がある。

日は移る、ウァルカは窓の暗くなりゆくに氣を注ぎ、その石のやうに固くなつた頭を壓へて、にっこりと笑ふ、自分でも何故かは解らぬ。暗は彼女の垂れゆく臉に挿げ、やがて熟睡安眠を約するのである、けれども夕暮になつて、靴屋の室は訪客で一杯になつた。

「ウァルカ、茶釜の用意をし!」主婦が呼ぶ、小さい茶釜である、客が飽くほど、茶が五度位は注いでは沸される、茶の後はウァルカは一處に全く一時間位は立つて客を視ながら吩咐を待つのである。

「ウァルカ、驅けて往て麥酒を三本買つておいで。」

「ハイ」と驅出す、睡魔を追拂ふといふ勢で出来るだけ走つて歸る。

「ウァルカ、酒を!」ウァルカ、栓抜は何處にある? ウァルカ餅を洗つて來い!」

終に客去り、火熄え、主人夫婦は臥床に入る。

最後の命令は響く、「ウァルカ、搖籃を振れよ!」

竈に蟋蟀啼き、天井に緑の燈光かざし、袴、襦袢の影はまたもウァルカの半開きし

眼の前に揺ぐ、忍びやかなる聲と影とは、取次にウァルカの頭腦を誘うて昏朦に惹く。

「ねんく、ころく、ねんころよ、子守が歌ふにねんねしな！」

依然、小兒は泣く、泣いて疲る、ウァルカは再び泥の路、小靴の人、父、母を見る。彼女は此等の現象を記憶し認むる、しかし半眠の間にあつて、彼女の身手足を羈し、彼女を挫ぎ、彼女の生命を縮めるやうな力は何であるか、解らない、四方を見まはして、此苦痛より自分を救得る力を求めたけれども、それが見出せぬ、終にその根氣と注意とを盡して苦んだ、仰げば緑の燈點が瞬くやう、その時、小兒の泣聲を聞いた、彼女は今、彼女の心を破る所の仇敵を發見したのである。その仇敵は、小兒である。

ウァルカは笑ふ、愕然とした、如何して是ほど單純な事を前には解くことが出来なかつたのか！緑の燈點、影、蟋蟀、それ等が微笑みながらしかも驚いて居るやうに見ゆ。ウァルカは一途に此念に奪られた、床几から起上り、瞬がぬ眼に公然と微笑し室を

往來した、彼女は今心地快く彼女の手足の自由を束縛した小兒から解放さるべき一の思案を取つたのである、それは小兒を殺す、而して後に睡らう、睡られる……。微笑し、瞬き、指を以て緑の燈影にかざしながら、ウァルカは搖籃にしのびより、小兒の上に打かたぶく、……。小兒を窒息せしめた所で床の上に滑り落ちた、これで睡られるといふ思想おもひからの嬉しさに、笑ふ間も無くその身も、死せる小兒のやうに、熟睡してしまつた。(チエホフより)

大椿事

朝、玻璃窓を覆ふた窓紗を透して旭日の光線が一ばいに映した室、優しい鼻容をした六歳になる半彌と、兄よりは二つ幼の捲髪で横廣の肥つたおになとの兄妹が、眼を覺し、雙方の臥床の障屏へだてから互に見合ひながらむづかしい顔容。

「さあ、お起きなさい、もう遅うございますよ、誰でも御飯は疾に濟んだ時分、何ですまだお眠いんですか」保母は喚醒く。

絨緞にも保母の上衣にも壁にも照りはゆる日の光は、児童と共に遊びたい様子なれど、二人ながらその方に背いて眼を開いたのゆゑ気がつかず、おこなは、唇を尖らし顔を歪めて疎懶い聲に『なにかあ、ばあや、なにかあ。』

半彌は、覺めた顔に何か強請り騒ぐことは無からうかと言ふ風に四壁を眺め、瞬を

して口を開いた時、恰度食堂から母親の聲、

『みい(飼猫)が子を産んだから、乳を與るのをお忘れでないよ。』

半彌とになちやんは、共に覺顔を伸して互に何か問ひたげに見合つたが早い、やあつと言つて床臥を飛起き、室が破れるやうな大騒ぎ、寢衣のまゝ、臺所に驅つけ、

『みいが子を産んだ！、みいが子を産んだ！』一齊に叫び出した。

臺所の腰榻の下に小さい箱がある、これは下男捨松が暖爐に焚く石炭を容れた空ものを産屋としたので、其處から外を凝視めた母猫の樺色の顔は、非常に塞れた容貌、小さい黒い子猫を擁へたその碧い眼は、疲れて神經過敏に見える、……その顔容で言へば、母猫の幸福は十分なのに唯一つ缺けたことがある、それは彼が自分の情と心と

を打込んだその子猫の父猫が此處に居ぬことだ。彼は、やあと言はうとして口を開いたけれども、聲は出ずに唯だふうと息がしたばかり、子猫等は頻に啼き出す。

二人の兄妹は、箱の前の土間に蹲踞つたまゝ、動かさず、息をつめて猫を見て居る……唯だ驚いたまゝ、後を追うて來た保母の小言も聞えない、但し雙方の眼の中には眞實に慶ばしい幸福といふ光が満ちて。

児童の養育に就て、家に飼ふ動物が思ひがけざる感化有益の事柄を演るといふことは疑ひなきことで、強くて寛大な犬、鈍で惰けものな小犬、俘囚になつて死んだ小禽、鈍のやうで高慢臭い七面鳥親切な老婦人のやうに、われ等が戯事に尾を踏んでも、彼には強い痛みでありながら何にも怒らぬ猫、これ等は誰しも識つたことであらう、此等の家畜の耐忍で信義で寛宏で天真である事が、児童の頭腦に如何ほど感化力を與へるか、干乾びた青白い道學先生の長談義や、水は水素と酸素との化合したものなりなど、児童に證據を見せてくれる女教師の曖昧な説明よりは遙に優たといふことも言はれる。

『可愛いこと、恰で廿日鼠見たいよ』嬉しい笑でになちやんが叫ぶ。「一、二、三、三匹だよ、一つは僕のだ、おまへに一つ、更一つは誰かの」と半彌は數へる、母猫はそれを嬉しいと思つたらしく、咽喉を鳴らして『ころくにやわー』多時眺めて居たが、眺めただけでは満足せず、兒童は母猫の下から子猫を取出し頻りに撫で、見る、撫でたばかりでは満足せず、寢衣の上に包んで、座敷の方に出かけた。

『母様、猫が子を産んでよ。』

食堂に客と話して居る母は、兒童が寢衣のつんつるてん、顔も洗はずに立はだかつた姿を見て、赤面して睨みながら、

『何です！、まの寢衣をお着かへなさい、失禮な彼方へお出で。』

兒童は母の叱言も客の前をも顧着無し、子猫を絨緞の上に置いて大聲を擧げて喜ぶ、その傍には母猫が随まつはつて、哀願的に啼きまはる、やがて兒童は保母に無理やり室に拘引されて、衣服を着る、朝の祈禱をする、朝食をも了したが、その少時の間

も、定つた務が嫌で、臺所へ行きたくて行きたくて堪らなかつた。

平常の爲る事や遊戯はもう全く忘れた、猫の子は此世に見えてから、實に前代未聞なものとされてその日二人の兄妹の心を打込ませて了つた、假令に半彌とになちやんに、甘い味を一升お貨を三千圓呈げるから子猫を一匹頂戴といふものがあつても、一も二も無く否だと言つたらうと思はれる位、晝飯時まで保母や料理人の言ふことを聴かずに臺所に入つたまゝ猫と遊んで居る、それで彼等の顔は、心から眞實に何か物を案じ居る様子、現在子猫を如何扱つてやらうかと用意するばかりで無く、將來の事まで考へた、考へた末は、第一の子猫は母猫を慰めてやるため家に居る事、第二のは田舎の家へ送つてやる事、それから第三匹は地窖に居て鼠を食べる事に決定した。

『皆、何故眼が見えないだらう？』になちやんは不審の間を發した『盲目よ、お乞食見たいよ。』

此質問には、兄半彌も答辯に窮して、子猫の眼の一つを開けてやらうと少時吹いた

り撫でたりしたけれども効果が無い、其他に二人が大に困つた事がある、子猫は幾等肉や牛乳を與つても嫌つて食べない、其前へ出された御馳走は、皆残らず母猫のみいが食べて了ふ、これは怪しからん母猫だと思はれたらしい。

半彌は言出した、「子猫には別な處に家を造へて與らう！、そして母猫が其處に訪ねて行くやうにしよう。」

兄の提議は直に實行され、臺所の三隅に各一の古箱小屋が裝置へられたけれども、猫等の家族の分家はなほ早過ぎたと見え、母猫は前にも現した様な心配顔で、成程各の分家へ訪ねに行つたけれども、孰も再び元の本家に引取つて了つた。

「みいは母様だね、子猫の父様は誰だらう？」
半彌が言ふと、

「さう、父様は誰だらう？」になちやんが繰返す。

「お父様が無くては生きて居られない。」

多時の間、半彌とになちやんは、此問題を議して誰が子猫のお父様になるかを考へ

て居たが、結局子猫のお父様として選出されたのは、尾の割れた大きな黒赤な馬であつた、此馬公は二階下の物置部屋に、その生涯を生ひて來た他の玩具の遺物と共に幽閉められて居たのが、今再び世に出ることとなり、早速物置部屋から曳出されて猫箱の傍に立たせられた。

兒猫三匹を、天にも地にも換へ難き堂中の玉と愛して居る半彌とになちやんの兄妹、今其父親と選定した木馬を、猫箱の前に立たせ、將軍が士卒に命令をするやうに、「そら御覽よ、おまへは此處に立て居て、兒猫を豎てやるんだよ。」

馬は何とも應答を爲ぬが、兄妹は甚と嚴かにしかも掛念の容で、申渡した。

兄妹の眼には今、此猫箱と臺所との外には世間無くて、その幸福は限り無く思はれた、しかし此時既に何とも言ひやう無き苦痛の瞬間が、背後に控へて居たと思ひもよらぬ事だ。

恰度、飯前に半彌は父の書齋に入り、思案さうな様に机の上を眺めた、燈の傍、印紙を貼つてある小包を横に一匹の猫が蠕動いて居る、半彌は氣をつけてその舉止を豎

ながら、折々鉛筆の頭で兒猫の鼻を突いて見る、……俄に床から跳るやうな勢で半彌の父親が現はれた。

『これは何だ?』怒れる聲は鋭い。

『それあ……それあお父様、猫の子です。』

『何故また私が許さんのに、此處へ持つて来たのぢや?、痴兒め! それを見い! 大切の小包を破つて了つた。』

半彌の驚いたのに對して、父は猫の子に少しも同情が無い、可愛らしいものだと思んでくれる代りに、半彌は耳を引張られた上、父は兒猫を汚らばしいと言つて捨松に持出させた。

食卓に對つてからも、父の叱咤は繰返される。

食事が初まると、不圖微かな啼聲が聞えたので、一同は何であらうと捜した末、になちやんの涎槽の下から、聲の原因が見出されたのは、やはり兒猫!

父はまた怒の聲に『にな! 室をお出!、猫の子は即時に溝に投つて了へ、其様な汚

いものを家に置くことはならん!』

兄妹は震へるばかり驚いた、父の殘酷はさて置き溝に殺すことは、彼等の猫と木馬とを捨て、箱を壊し、彼等の未來の企圖をも打破することとなる——その樂しき未來は第一の兒猫はその老母を慰め第二は田舎に生活し、第三は地窖にて鼠を捕る事である——斯う思うて居る兄妹は、一齋に叫び出して、兒猫の爲に特別の仁惠を父に懇願した、父は彼等の懇願を許しはしたが、但だ彼等は再び臺所に行くことならずまた兒猫に手も觸れぬといふ條件附であつた。

食後、半彌兄妹は此方の室から彼方の室へと彷徨くのに疲れるばかり、臺所に行くことならぬとの禁制は、彼等を落膽させて、例の美しい味をも受けつけずに、却て惡戯をする、母に對してもぶりぶりする。

斯ういふ風で、夕方になつた時、叔父さんが来た、彼等は早速叔父さんを傍に引張り行き、溝の中へ兒猫を投げろと言つたお父様の叱咤を訴へ、口を揃へて、

『叔父さん、僕等の室へ猫の子を拉れて来るやうにお母様に言つて下さい! 必定

よ。

叔父さんは、縄られた身を退さりながら、

『好しく、心得た……承知したよ。』

叔父さんは、滅多に一人で来たことは無い、大抵チロが随いて来る、チロは和蘭産の大きな黒犬、肉厚き耳は福相に垂れ、棒のやうな尾を伸し、沈黙で底意のあるやうに取すました容貌に、高く止つた風を持ち、兒童に對しても更に氣を留めず、鷹揚に彼等の傍を濶歩しながら、彼等を腰楯か何ぞのやうに、その太い尾で敲いた、彼等兄妹は、平生心の底からチロを嫌ふけれども、今此時、重大なる事件は、尋常の感情以上に二人の心を傾けさせて、半彌はその大きな眼を瞪りながら『になちやん、おまへ知つてるか、馬の替りにチロをお父様にしやう！馬は死んでるけれど、チロは生きてるもの。』

夜になつてから、彼等はお父様が早く例の骨牌遊に坐つてくれ、ば好い、その時チロを、誰も見ない處で、臺所に拉れて行くことが出来ると思ひ、頻にその時が待

ち遠し。

果して父は骨牌に腰を据ゑ、母は茶を沸すに忙しく兒童に氣を注げては居ない、…幸なる時こそ來れ！

『おいで！』半彌が妹に私語いた、其一刹那、捨松が室に入り來り、にやりとした口つき、

『奥様、飛んだ粗忽を致しました、チロが兒猫を喰つて了ひました。』

になと半彌とは青くなつて、捨松を恐ろしさうに見つめた。僕は更に、にやりとして、

『さうです、奥様、チロは箱の處へつか／＼行きました、喉を鳴らしながら一口にやつたのでござります。』

兒童二人は、家中のものが此騒動に立上り、罪を犯したチロに驅つけもすること、思つて居たが、兩親は從容いて椅子に腰懸けたまゝ、唯だ大きな犬の亂暴な喰方に驚いたことを言つたばかり、やがて父母は笑つた——チロは卓子の處に來て、尾を振つて満足さうに甜舌をするのである——それに引かへ母猫は如何にも惱亂された

容態、誰をも疑はしげに眺め、哀れげに鳴きながら、尾を擡げて室を彷徨いた。
『もう、半彌もにも寝る時ですよ、十時が鳴りました!』

母に喚ばれて、二人の兄妹は、その臥床に入れられた。

残念な、厭はしい、悪事をしながら罰せられぬ子ロの爲に、その心を傷られ、その生命を亡つた猫の哀れさに、彼等兄妹は、泣きながら夢路に入つた。(チエホス)

小 四

新聞紙が言ふ通り『犯人の頭は法廷の床上にも達かなかつた』しかも此裁判は噂の種にもならない、それは誰も犯人たる小さきトブラの生死に就ては、縛つた麻繩ほどもに氣づかつては居ないからである。

陪席判事は、暑い午後を通じて赤塗の法廷に坐つて彼を訊問した、彼等が問を出す毎に、小さき彼トブラはお辭儀をしては泣きすゝりをする、陪席判事は竟に證據不充分的決議をなし、判事は之に合意した、即ち小さきトブラの妹の死體が井戸の

底から發見されたは事實である、その時にトブラは唯だ半哩以内の場所に居たの
あら、して見ればトブラの妹は何かのはづみに井に陥つたものと思はるゝとの判定から、トブラは放免せられ、行きたい處へ行けと宣告せられた。

此放免は、御趣意の結構なほどにはトブラに取て寛典では無かつた、彼は何處にと
言つて行く的は無い、食ふべき的も無い、着るべきものも持たぬのである。

彼は裁判所の庭に走り行き、井欄の上に坐り、下を見て若しこの眞黒な水に飛込み
そこねる時には、他の地獄の黒淵を通して何な苦しい旅をするであらうかと驚いて居
る、處に役所の馬丁が煉瓦の上に置いた馬飼糧の空袋を認め、ひもじさに、馬が何
なものを食ふのかと袋の口を開けて手を入れた。

『泥棒! 今放免されたばかりぢやないか! 此方へ來い!』と馬丁が叫ぶ、トブラ
は耳を引ばられながら、今その叫を聞いて居た大兵肥滿の英人の許に伴れられた。

『ハア!』と三度ばかり強く言つた英人は、『彼を網に入れて家へ連れて行け』と命
じた、トブラは馬車の網の中に入れられ、いふまでも無く彼は豚と同様に酷遇され

るだらうと思はるゝ態で英人の邸へ運ばれた。

『ハア！』と英人は前のやうに言つてさて、『濡れた米、欲しいか、おまへ等の食物を何か小さい乞食に與れ働はつてやれ』。

トブラが馬丁小舎で御馳走を食べ了ると、馬丁頭は『如何したわけだ』と問ふ、馬丁仲間が家の隅の休息所に集つて『おまへは馳走になるわけでも無かつたらば俺等の處に出られる身ぢやねえよ、おまへ如何してまた裁判所に引かれたのかの？、おい、小僧さん話しな！』。

トブラは従容いて、『食ふものが無かつたのだ………好い家だなあ』。

馬丁頭『正直に話せ、話さないと駱駝のやうにはねる彼の大きな赤馬の厩を掃除させるぞ』。

トブラは睡で塵を弄りながら『私等は油しぼりだ、父さんとお母と私より四歳上の兄さんと私と妹とだ』。

『井戸で死んで居たのはその妹か』と法廷で傍聴した男が問ふ。

トブラは悲しうに『さうだ、井戸に死んで居たのだ、私の油しぼり小舎のある村に病氣が流行つた、妹が一番に眼を患つて見えなくなつちまつた、それから父さんもお母も同じ病氣で死んで了つた、私等は子供ばかりになつた、兄さんが十二、私が入歳それから盲目の妹だ、それから兄さんと二人で油しぼりのサアヂャンさんに頼んで食べさせて貰ふとしたが、機械の棹が私等には動かかない、種々外の事を頼んで働かして貰つたが、サアヂャンは私等を欺して、食はしてくれなくなつた、悪い人だ』。

馬丁の女房等はこれ聞いて一齊に『まあ可哀さうに、子供を欺すなんて酷いことをなあ』、と言つてやがて聴者の仲間に入り、更に『ほんに、油しぼりは辛い仕事、強い大人でなくちや出来ないよ、私もお父さんの家に働いて居た時分……』。

『黙つて居るよ、小僧さんそれから如何した』。

トブラは語りつく『何時だつたか、家の梁が落ちて壁も屋根も一處に家が潰れて了つた、私等は家が無くなり油しぼりも出来ない、兄妹三人でぶら／＼出た、原を

通つて何といふ處だか知らない處へ行つた、飢饉が流行つて居る、私等は十一ペンス持つて居たけれど此處へ行つたら七ペンスになつた、それを夜寝て居る中に兄さんが悉皆持つて何處へか行つて了つた、私と盲目の妹と村を歩いて乞食をしたけれど興れないで、皆英國人の處へ行け、必定くれるからと言ふ、私は英國人て何だか知らないけれど、白い人で天幕に居ると聞いたから、だん／＼歩いて行くと、私等は食ふものが何にも無くなつた、暑い夜に妹は食へたい／＼と泣きながら、私等は井戸の處に来た、私は妹に井欄に坐れつてさう言つて、妹を井戸の中へ落した、妹は目が見えない、餓死ぬよりは死んだ方が好いのだものを。女房等は一齊に『まわーまわー餓死ぬよりは死んだ方が好いつて、井戸へ落したのだとさ』。

トブラは更にいふ『私も直に飛込まうとしたら、妹がまだ死な／＼いで井戸の中から兄さんと呼んだから、私は吃驚して駈け出した、畑に居た人が来て、私が妹を殺し井戸を汚したと言つて私を白い恐ろしい、天幕に居る英國人の處へ拉れて行き、そ

の英國人が私を此處へ拉れて来た、證據が無いからつて助けてくれたけれど、飢餓いよりは死ぬ方が優しだ、妹は目が見えない唯だ小さい子だつた。馬丁頭の女房は『唯だ小さい子だ』と真似のやうに言つて更に『でも、汝は何だ、

鳥のやうな弱い、生れたばかりの駒のやうに小さい、汝は何だ?』トブラは『もう腹が一杯になつたから』と言つて土間に身をよこにし『わしは寝やう』。

女房はその上に衣物をかけてやると、小さき彼はそのまゝ束の間の夢を結んだ。

(キツアイングエー)

流 人

渾名を天狗といふ老爺セミヨンと、其名にては誰も知るもの無き若き韃靼人とが、唯二人、川邊に傍ひて火を焚ける、彼方の小屋の裡には、なほ他の三人の渡守あり、セミヨンは年六十、瘦せたる上に齒は抜けたれど、肩廣く骨格堅固の狀貌、正しく

岩壁に見え、今しも酒を飲めるなり、若し此老爺の衣囊に細瓶無く、細瓶に容れしものも無く、また小屋なる朋輩が、そのウオドカ(酒の名)を老爺に強請る懸念無かりしならば、彼は疾に臥せしなるべし。韃靼人は、病み衰へて襜褕に巻かれし身の、なほウォルガ河に遠からぬ故郷シムビルスクにての生活の榮華を何處にかほのめかし、その留守に残したる美しくて利發なる妻を恃めるなり、年の頃は二十五ほどなれど、今焚火の先に映れる青ざめし顔は、陰氣に憔悴れたる姿を併せて、思の外に兒童らしく見ゆ。

「さうだ、汝には天國だとは思はれまい、見なさい一目だ、汝の周邊の水、不毛な隄、泥土、それぎりだ、祭週日は了んだが、また川を水が流れる、それに今朝の雪は如何だつた。」

天狗爺はかく語り出しぬ、韃靼人は唯だ怖氣に四圍を眺めながら「つまらないな!、つまらないな!」と呻くのみ。

十歩の下を暗々として冷に囁囁さ流る、川は、その断岸に沿ひておのれが手に川床

を排きながら、海にその身を運ばんと急ぐ、隄には、渡守がカーペーセムと呼做せる大なる艇一艘、その向側に遙か隔て、火の光、或は燃え立ち或は燃え落ち、或は焰と焰と斜れあひて、蠟燭く小さき火龍の形状を描く、此は枯草の野火なり。火龍の後にはまた何ものも見えざる夜の暗黒、暗黒の中なる川よりは、艇に當りて碎くる細氷の響、憂々として聞ゆ、唯だ暗黒なり、唯だ冷き夜なり、

韃靼人は空を仰ぎぬ、故郷に見しと同じき萬點の星、森々として光芒あり、同じき黒き天空あり、されど何かもの足らず、家にては、シムビルスクの市にては、斯かる寂しき星は無かりしが、斯かる冷き天は無かりしが。

彼はまた繰返しぬ。「つまらないな!、つまらない!」

天狗爺は嘍出しながら「今に慣れる! 汝はまだ若い、愚痴だ、母親の乳がまだ唇頭に残つて居るだ、今ぢやあ汝には自分ほど不幸なものはないと思つて居やうが、なに直に時節が来る、「神さま、どうか此様な生涯を誰にも彼にも授けるやうにして下さい」さうやうな時節が来るよ、まあ早い話が俺を見なさい。一週間の中に水が落

下るだらう、俺等や小さい端艇を浮かせる、そこで汝等は市に遊びに行くだらう、俺ばかりは此處に残つて、對岸から此方へ、此方から對岸へと舟を漕いで居るだ、二十年来今も俺は、毎日毎夜の渡守、水の下には鮭が居るバイク(魚名)が居る、水の上はこの俺よ、それで神さまにお禮を申すだ、俺は何にも要らない、あゝ神様唯にも斯ういふ生涯を許して下さい！。

鞆鞆人は、楳柵を投入れた火に近く寄りながら、應ふることもなく、

「俺の父様は病氣だから、若し死ぬやうなことがあつたら、母親と女房が此方に來る筈だと約束がしてゐる。」

「母親と女房が來て汝如何するのだ。」爺は反問し置きて「兄弟、其様な事は頭から捨てる、何にもならない、そりやあ鬼が考へさせる事だ、呪咀など聞くな、女の事なんか考へさせられたら、其様なものは要らないと言へ、また自由になりたいなど、考へさせられたら、それも要らないと思ひ反せ、決して何も欲しいと思はないが好い、親は元よりだ、女房も自由も家族も家も何にも要ないものだ、其様な事を思ふな！」

爺は斯く言ひ了つて、夫の瓶より一杯を飲み息を繼ぎ、「兄弟、俺だつて尋常の渡守に生れたぢやあない、寺役人の子だ、クルスク町で自由に生計した時分は、禮服も着て横行いたものだ、それが今時分で斯ういふ境涯、裸體で地上へ寝て草を喰つても居られるやうになつたのも、あゝお助けのものさ、俺は何にも要らぬ、誰に遠慮もせぬ、凡そ世の中に俺より有福なものもなければ、また俺より自由な人間も無いと知つて居る、露西亞から此處へ來た時から、俺は何にも要らぬと意地を徹した、女房や家や自由になりたいといふ欲の魔が憑した事もあつたが、毎時それを追拂つて了つたので、今では汝が見る通り、俺は結構に斯う生活して不平も何にも言はぬのだ。この魔が憑す時に一寸でも負けて見ろ、其男はもう亡くなつて了つて二度と浮ぶ瀬は無い、それこそ首つたけ泥田の中に沈んで出られないと同じだ。」

爺は更に續けて、

「これは俺のやうな賤しいものばかり浮ぶ瀬が無くなるのぢやない、良く生れた奴

育のある男でも、魔が憑した考を出すと同然破滅だ、今から十五年前だが、露西亞から此處へ一人の紳士が送られて來た、此人は兄弟と財産争をした結果に何か不正なことを行つたのださうだ、聞けば身分は王族か華族の親族だとよ、さうかも知れない、役人だつたともいふが、それも知つたものは無い、兎に角さういふ肩書のある男が來たのだ、そして來ると直にムオルチンスクに地所と家とを自分で買つた、そして斯ういふのだ、「私は自分の勞力で額の汗で是から生活するつもり、もう紳士ではない、罪人であるから」俺は「それは結構なことだ、神の冥加にかなふ好い心がけた」と言つてやつた、其時はまだ元氣な輕躁な話の好きな男で、自分の草を刈り、魚を漁りはしたが、一日に六十ウエルスト（一ウエルストはわが九丁四十七間餘）ほど騎馬で出て行つた、これが抑も不幸の種蒔き、初めての年から此人は郵便局に行くためにグイリノ町まで騎慣れて居たのだが、端艇で俺と二人の話に、「あゝセミヨン、家郷から私に金を送るのは如何ほど長く續かうか」と太息のやうにいふのを聞いて、俺は「ヴァツシリ、セルゲイツチ、そりや無用ぬ心配だ、金といふも

のはおまへさんに如何な好い物なのか、古臭い方法は捨てなさい、家は財産も無い昔の夢と諦めて忘れて了ひなさい、そして新しく生活すが好い、魔が憑すのに引懸るのはつまらぬ事だ、不幸の外に何にも持て來てはくれぬ、今おまへさんは金ばかり欲しがるけれど、更少し經つと金の上にもまた欲しいものが出て來やう、底止の無いことだ、若し幸福が欲しいといふなら、一切何にも欲しがらぬが好い、………運といふ奴は、おまへさんにも俺にも、もう背を向けて居るので、此上運の奴に好いやうにと頼む便宜も無ければ頭を下げる途も無い、おまへさんは、今ぢやあ運の奴を輕蔑し嘲つてやらなさやならないのだ、さうすると、運の方で自分から笑ひ出すかう俺は話してやるのを毎時のやうにして居た。』

『此人が來てから二年目のことだつた、渡船に乗るのも勢よく、兩手を摩りながら笑顔で「これから妻に逢ふためグイリノまで行くのぢや、妻も私を氣の毒と思ふて來てくれた、妻ほど好いものはない」と、話すのに息がはづむほど喜んで居た。』
『翌日、その妻と同伴に歸つて來た、成程な若い奇麗な女で、帽子を冠つて居る、

しかも少女せうじょを連れて来た、それで亭主のセルゲイツチは、家内の傍を離れないで騒ぎまはる、始終とろけるやうな眼をして嬉しがつて居る、天へも上げるやうに賞めそやす、「なんと、セミヨンセミヨン兄長、西伯利でも生活くわくせるよ」と喜んで話すのだ、俺はまた「今はさうでも始終はさうは行くまい」と確と考へて居たのだ、其時からといふもの毎週間、家郷から金が来て居ぬかと言つてはグイリノへ出かける、際限無しに金が用ゐるのだ、家内が来れば、その来たのでまた欲が出る、今度は「私のために妻の若さ美しさが西伯利に埋もれて了ふのは氣の毒だから、出来るだけ妻を慰めてやらなきやならぬ」との口癖、何でも妻のためだといふので、役人とかこれと思ふ人には交際をして、酒も飲ませる馳走もする、ピアノも無くてはならぬ、椅子に狗の皮位は敷きたいと、畢竟つまつは贅澤ぜいざくに奢るといふわけさ……其様な骨は折つたが、その妻の居たのは長くは無かつた、如何してまた居られやう？、泥土、水、寒冷、樹や草は禿た地方、菓實こくじは無し、何處を見ても熊か醉漢のんざんの居るばかりなもの、彼得堡で樂ばつかりした此の女は、可愛がられて瘦せてゆく調子で……理わけは無ない病氣

になつちまつた……其筈さ、亭主だとして前のやうな男ぢやあない、罪人だもの……それかれ三年後、忘れもしない聖母祭の夜に、對岸かたがはで呼ぶ聲がするから舟を出す、顔を包んだ貴女と役人の若い男が、橋へ相乗で居る、渡してやるとその橋で直に走つて了つた翌朝、ヴァツシリ、セルゲイツチが大汗に湯氣を立て、騎のりつて来た、「私の妻は眼鏡をかけた男と行きましたらう？」と聞くから、俺は「然さう、野原のほらの風搜さがしかな」と言ふと、そのまゝ跡を追つて、五日ばかり歸つて来ない、漸と歸つて来て俺が渡してやる時、セルゲイツチ、端艇はなぶねの底に投げられたやうに横になつて、板に頭を打つけて呻くぢやあないか、俺は笑つて、「西伯利でも生活くわくせるよ」と言つたのを憶出させたけれども、彼奴やつこさんは唯だ心持不快こころがたくするばかりだつた。』

「それから後、彼奴さんは家内の事と放免はつめんの事とばかりに浮身をやつして日を送るのだ、露西亞に歸つ了つた家内に逢ひたいから戻つてくれと手紙をやる、そればかり考へて居る、毎日のやうに彼方に行き此方に行き馳けずりまはる、今日は郵便局、明日は役人に逢ふために市といふ具合に、如何か露西亞に返られる特赦を貰ひたい

と款頼をする。自分での話には、電信料ばかりでも二百ルーブルも費つたさうで、買つた地所は賣り、家は猶太人に質入をする、髪は鼠色になり身體は歪んで来る、顔は肺病人のやうに黄く變つて、話をするに毎時涙ぐんで居るのだ、斯うして八年の間、嘆願に身體を消磨つて居ると、また生々して來たから如何いふ理かと思ふと、新しい慰藉が出来たからだ、そら、前に小さかつた娘が成長くなつたのだ、さあ可愛くて堪らない、眞にそりや醜くない容貌、愛くるしい黒い額髪、性質も品が高い方さ、日曜日にはグネリノ教會へ連れて行き、此渡で端艇に乗つた時でも、彼奴さん娘から目は放さず「セミヨン兄弟、西伯利でも生活せる、幸福だ、見てくれ、私の娘を、千ウエルストの間にやあ私ほどの娘は決してあるまい」と娘の自慢さ、成程、俺が言つた通り眞に娘は美しい、自慢するも無理は無い、けれどもよ、俺は考へた「いや待て、娘は若い、血が通つて居る、生きて行かなければならぬが、その生きてゆく生活が此様な處で如何するか」兄弟、所詮は娘は心配し始めた、瘦せる弱る萎れるで到頭瘴氣になつて、今では、起立つことも出来なくなつた、肺病

さ—まあこれが西伯利人の福音といふのさな、西伯利で生活す方途なのさ、………さあ娘が病氣だ、セルゲイツチは醫者を頼むのに日を暮らす、二三百ウエルストでも醫者があるとか病氣を治す魔術師があるとか聞くと彼奴さん直に行かなさやならぬ、………考へても恐ろしいそれに費ふ金高は飲料にして見る大したものだ、………娘は到底死ぬ、助からない、娘が死ぬば彼奴さんも共に亡くなるのだ、悲しいので首を絞るかまた露西亞に逃出すか、何方でも同じだ、若し逃せば捕まる、それから俺等にも吟味がかかることになる。』

天狗爺は且つ飲み且つ語り續けたり、樺櫓の火を、冷き世に唯一つ熱き恩恵とあたれる鞆鞆人は、片時も寒さに肩をふるひながら「でも、その人はやあ好かつたのだなわ」

「何が好い事がある？」

「女房に娘………その人は如何な難儀をしても、如何な耐を受けやうとも、兎も角も女房と娘に逢つたのだもの………汝は、何にも欲しがるなと言ふけんども、何に

も無い事お好くない事だ、その人の三年の間、女房と生活たなわ神さまの引合である、い、何にも無い事お好くない、けんど三年は好いぢやないか、汝は解らねえのだ。」

露語を巧に語らんと努めながら、寒冷には慄へたる韃靼人は、今また此異境に死なざらんこと、冷き土に埋められざらんことを神に禱らんとす、若し彼の妻が、此處に来ることならんには、假令や一日の間にてても一時間にてても、さる幸福のためには、甚と恐るべき苦痛をも受くるを厭はず、神に謝すべし、何ものも無からんよりは、唯だ一日なりとも幸福のあるこそ好けれ。

彼は再びその美しき敏き妻を、家郷に残せる物語を語る、彼の頭に雙手を置きて、おのれは少しも犯せし罪なきに、斯く徒に苦むことをば叫ぶが如くセミヨンに訴へぬ、彼の二人の兄弟と叔父とは、さる農家の馬を盗みて、その家の老人を殆ど死せんにばかりに毆打すえたり、されど世間は不公平にも罪無き彼をも犯罪人に加へ、三人の兄弟を西伯利に送りぬ、富める人なる叔父は、罪を問はれず家郷に残れるな

り。

「なに、今に慣れるよ。」

天狗爺は斯く冷かに言ひたれど、韃靼人は何にも言はず、唯だ潤ひし眼を火の方に向けたり、彼の顔には、疑惑と不安とを示せり、何故に此暗き寒き異郷の夜に其身を置きて故郷のシムビルスクに居ることならぬかを、なほ合點せざる如く見ゆ。天狗爺は火の傍に横になりて何事をか默笑し、低く鼻歌を唄ひしが、やがてまた、

「彼娘は親父と一處で何の幸福があらうか、彼奴さんはそりや眞正に娘を可愛がつてそれで自分を慰さめて居るのだが、汝等にや指はさ、せないわ、堅い殿しい親父だ、汝等を若い娘と一處に置いちやあ殿しいといふことは入用があるまい、娘子の入用なのはちやはや言はれることだ、ハッ、ハッ、ホッ、ホッ、……香水、白粉、香ぶくろ、……さうさ、へん笑はかしやがる、……ウオドカも無くなつた――寝ろといふわけか、あ兄弟、俺はもう寝るよ」

爺は身を起して小屋の裡なる臥床に入りぬ、韃靼人はなほ更に火を柵柵に焚きそへ

て、元の如く横になり、その故里と妻との上を懐ふ、若し妻が唯だ一週間なりと一日なりと此處に来ることならんには、その意に任せて歸らんとすれば直に歸すべし、少時の日ならば元より好けれど、假令唯だ一日なりとも、來らぬには増せり。されど若し妻が約束の如く此處に來りし時、妻を養ふには如何にすべきか、彼は何處に生活すべきか?

『あゝ、食ふものが無へで生活することが出来ぬか』彼は覺えず獨り呻きぬ。

晝夜に働く棹一本の骨折賃は、唯だ十コペック、稀に情ある旅客が、酒代にと幾分の錢を置くことあるも、皆他の朋輩に分配つのみにて、韃靼人には少しも與へず、唯だ嘲笑ふばかり、されば貧苦は彼を飢に惱ませて寒冷にさいなみ、戰慄ふ全身の置き所無し、小屋に入りて臥さんにも、身を蔽ふべきものとは無し、此處に居りても同じことながらなほ火の氣あるが、何も無きには優れるなり。

一週日の間に水は落ちるなるべし、老セミヨンの外渡守は用無くなるべければ、韃靼人はまた村より村に勞作を求め麵包を乞ふ浮浪の身とならではかなはず、あゝ妻

は僅に十七歳の春を迎へしばかり、内氣なる性なるを、白地に羞かしげ無く麵包を乞はんと村を彷徨き得らるべきか、思へば餘りに淺ましきことなり。

やがて韃靼人が見上げし時は曙なり、端艇、楊柳、川波など明白地に見えたり、四方を顧みれば、その裾に褐色の屋根葺きたる小舎立ちし粘土の坡見え、坡の上に村落の小舎、村落にてははや鶏鳴さぬ。

粘土の坡、端艇、川、異しき惡しき人々、飢餓、寒冷、病痾、——實にわが生涯には一つだに斯かるものは無かりしが。あゝ、こは夢なりしか、われは眠りながら、おのれの軀を聽きたるなりと韃靼人は思ひぬ。

彼は醒めたるが夢か、眠れるが現かに思ひ惑ふほど、身はその家郷シムビルスクの家に在りし懐なり、唯管に妻の名を呼び妻はまたそれに應じ、加之次の室には彼の老母が臥したりと想へるなり、……恐ろしきは夢なる!……何處より夢といふものは來しぞ……夢は夢、現は現と知りて彼は微笑みてその眼を開きぬ。此は何の川なりしか、彼のウォルガ河?

雪は降り来りぬ。

對岸より人の聲「オーイ、船頭！」

鞆鞆人は、身を起して朋輩を呼醒しぬ、小屋なる彼等は、羊皮の襜褕を曳きつり、見はてぬ夢を帯びし濁聲に嘔喘きながら、岸に現はれたり、斬るが如く川風寒ければ、歴はれしやう覺えて、轉げ落ちんばかりに船に乗りぬ、鞆鞆人が三人の朋輩と共に、長く平たき楫を取上げし姿勢は、暗に透して宛然蟹の爪を擧げたるに似たり、老セミヨンは、舵を横に腹這となりぬ、對岸よりの喚聲は續きつ、二發ばかり短銃の音へ聞えぬ、客は正しく渡守のなほ眠れるか或は村落の酒家に行きたりと思ひしなり。

天狗爺は、宛然世の中に急ぐといふ要はあるものならずと悟れる人かと思はるゝ調子にて「間に合へば好いのだよ、同じことだ、騒いだからとて仕様がねえ。」重く粗造なる端艇は、岸より離れて楊柳の茂生をかき分けゆく、その柳の微に後の方に靡き返る揺動にて僅に船の進むを示せり、舟人は徐に楫を擧げぬ、舵なる天狗

爺は、空に弓を描きたる身を徐に左右に振りぬ、淡暗の中に現はれたる此體は、宛然前世界の長さ爪を持てる怪物の背に乗りながら寒く寂しき無何有の海に浮べるが如く、夢に歴はれたる物の形貌とも見ゆ。

程無く楊柳は盡きて、開きたる水の中に出でたり、軋々として調よく水を掻きゆく楫の音は、はや彼岸に聞かるゝなり、「早く、早く」との叫聲は水を渡りて来る、十分の後解は重げにその舷を岸に着けぬ。

天狗爺は、顔に點せし雪を拂ひながら「降るわ、降るわ、どうして斯う降るんだらう！」

岸の上には、背低き瘦せたる老人、短き狐皮の外套に白き小羊皮の帽を戴きたるが、乗りたる馬車を離れて佇立みたり、彼の顔は思に沈みし陰翳の色あり、何事か懐出さんとする態に加へて待たせられたる怒なほ残れるやうなり。

老セミヨンは、その傍に近づき、微笑みながら帽を除りし時、客は初めて口を開く「娘が重患いなので、大急ぎにアナスタカウカまで行くのぢや、彼處に新しい醫師が

来たさうぢやな」舟人は解に馬車を運び入れ、舟は再び此方に漕かへる。
客は、舟に乗りしまゝ動かす、雙手の指を組合せて言語無く、馭者がその面前ながら烟草を吸はせてよと請ひしにも、聴えぬさまにて答へず、セミヨンは此時舵を腹道になりながら、わざとらしき顔に彼を凝視めて、

「アツシリ、セルゲウイツチさん、西伯利でも生活せるね！西伯利でも！」

天狗爺の顔には、彼が曾て證明し豫言せし物事が總て適中せるやう成行きたるを誇るが如き色見えたり。客の憫むべき頼無き相貌にて狐皮の外套着て悄れたる姿は、正しく唯だ此爺の愉快を増せしのみ。川岸に着きて馬の用意をなせる間に、爺はまた、

「セルゲウイツチさん、斯様な泥濘の日に旅行は難儀だ、乾燥くまで一二週間待つたら如何です、眞箇におまへさん、少し位出かけた處が初まらない、……行つて何か効能のあることでもあらば格別、しかしおまへさんだつて行つても駄目なごは知つて居なさるな……もし。」

セルゲウイツチは黙して、舟夫等に幾分の錢を取らせ、車に上りて馳せ去りぬ。

「醫師に診て貰ふ！その醫者の後がまた眞箇の醫者が欲しくなる……恰で野原で風を捉まへるか、魔もの、尾を握らふと思ふのか、何時まで骨を折ることだ、……彼様いふ男の氣が知れぬわい！罪造りだなわ」

後に斯く獨語ちたる爺は、寒冷に身をふるはせて、小舎に入らんとす。

鞆鞆人は、爺に近く歩み寄り、憎し忌はしとその顔を凝視め、戦へながら語り慣れざる露語に鞆鞆語を混へつ、

「彼の人は、善人だ、善人だ、汝は悪い、汝は悪い人だ、彼の人は、善い心で立派な人間だ、汝は畜生だ、……彼の人は生きて居る、汝は死んで居らわ……神さまは嬉しいこともする悲しいこともするやうに、人間を造らした、汝は何にも要らねえと言ふだ、汝は石塊だ、土だ、……石塊は何にも要らねえ、汝は何にも要らねえ、汝は石塊だから、何の神さまが愛てくれるもんか、神さまは彼の人を愛しなさる！」

舟夫等は、笑ひぬ。韃靼人は唯一人、忌はしげに額を擧めて、その手を振り、身に纏へる襦袢を更に引しめながら、檣柁火に寄り、セミヨンと舟夫等は、小舎に返りぬ。

床に敷きたる藁の上に、各自身を横へながら、『寒い！』と舟夫の一人が言へば、『さうだ、暖かぢやあ無い、立ん坊の身分ぢやなあ』と他の一人は言ふ。

彼等は皆横になりぬ、小舎の扉、風に開きて雪その中に吹込めど、誰も起きて扉を閉ぢんとはせず、唯寒さに過ぎて懶きなり。

セミヨン『俺の言ふことに間違はねえ、お助けなもんだ！』

『そりやあ解つて居る、汝は立ん坊に生れたのぢやあないか……如何して汝にやあ悪魔の方で逃げて行かあ。』

小舎にて斯く語る時、外より犬の悲鳴する如き異しき聲聞えぬ。

『何だ？、誰だ？。』

『韃靼人が哭くのだ。』

『ふむ、馬鹿だな。』

『彼奴も今に慣れて了ふよ』とセミヨンは言つて、眠りぬ。

やがて他のものも眠りぬ。されど小舎の扉はなほ閉されぬまゝにして。

(チエホフノリ三十七年六月)

鷗心録 (をばり)

明治四十年七月廿七日印刷
明治四十年八月十日發行



臨心錄

金七十錢

著者 角田 浩々 歌客

發行者 東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地 金尾 種次郎

印刷者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 河本 龜之助

印刷所 東京市京橋區築地二丁目廿二番地 株式會社 國光社

發兌元
發賣元

東京市京橋區五郎兵衛町 金尾文淵堂
大阪市東區南渡邊町 杉本書店

文淵堂發兌圖書賣元

東京市神田區表神保町	東京市神田區裏神保町	東京市日本橋區吳服町	東京市京橋區尾張町	東京市京橋區中橋廣小路	大阪市東區南波邊町	京都市烏丸佛光寺東入	久留米市米屋町	名古屋市中區一丁目	名古屋市中區玉屋町
東京堂書店	上田屋書店	北隆館書店	東海堂書店	前川文榮閣	杉本書店	東枝律書房	菊竹金文堂	星野文星堂	三輪靜觀堂

明治四十年六月改正

金尾文淵堂書店

金尾文淵堂發兌圖書要覽

著山愛路山

社會主義管見

四六版洋裝
金參拾五錢
郵税金六錢

本書
目次

○社會主義評論
○我々祖先の社會政策
○國家社會主義梗概
○國家社會主義と社會主義
○社會主義年表及總論

支那思想史

日韓文明異同論

二篇合冊
四六版洋裝
金四拾五錢
郵税金六錢

著耳玄川澁
畫折不村中

從軍三年

金六十錢
郵稅六錢

軍事裁判官としての澁川理事、俳人としての玄耳氏が、颯棘と精緻と雅淡と滑稽とを練り成せる一種神怪なる心鏡に映じたる日露戦争の裏面的光景が如何に多趣味なるかを見よ

本書を讀まぬ江戸子は田舎者に馬鹿にされる

東京見物

金五十錢
郵稅六錢

本書を讀んだ地方人は東京者に馬鹿にされぬ

瀧 精 一 著 藝 術 雜 話

金 壹 圓 郵 送 料 十 錢

本書は簡庵瀧精一氏が數年前より大阪朝日新聞紙上に掲出して既に世の好評を博したる藝術雜話を編輯して一書となせるものなり。今や雜誌に新聞に美術に關する議論の出づるもの多しと雖も、或は單に其原理を講述するに止り、或は區々術品の批評をなすに過ぎず、本書の如く著者が自家獨特の見識を以て學理と實際との兩面に亘りて藝術を論究したるもの、未だ他に類例あるを知らず。説く所或は藝術一般の要義に關するものあり或は繪畫に關するものあり、或は建築、彫刻、美術工藝に關するものあり。殊に叙述の體裁は平易にして何人にも理解し易く、所謂應用美學の一書として、美術家、賞鑑家に勿論、苟も美術に興味を有する人々に對して益する所蓋し夥からざるべし。

木 下 尚 江 著 懺 悔

金 卅 五 錢 郵 稅 四 錢

懺に惱み死生に惱み功名心に惱みたる著者が、始めて人生の奧義に觸れて奮然新生活に慕進せんとするに當り、既往を回憶して赤情を吐露したるもの即ち「懺悔」の一篇となす。曾て他を攻撃するに寸毫の餘地を許るさざり、彼は、今更自らを刑罰するに及で亦半點の容赦を與へず。故に本書は著者に取て過ぎし苦悶の告白なりと同時に、實に新に挑むんとする難戰の宣言也。偽善なる社會よ、一條の荆鞭既に汝の頭上に落下し來れるを見よ。

菊 池 幽 芳 著 流 球 爲 朝

(す 介 紹 を 然 自 の 球 琉)

近 刊

この書「琉球と爲朝」「離島めぐり」二篇を収む前者は一面に於て史的な研究なり、一面に於て自然の紹介なり、後者に至つては殆んど現世より隔離されたる美なる自然と奇なる風俗の紹介なり、由來琉球の名一種の美なる聯想を伴ふも、その性質その動植物その風景その風俗全然非内地的にして多趣味なる琉球の特色を形作れるその自然に就ては未だ曾て世に紹介されたるものなし、著者乃ち自ら琉球を跋渉して始めて此好著あり、篇中の要目左の如し
琉球に於る爲朝舜天の遺跡 弓張月と琉球 美なる琉球の自然 鐘乳洞 累々たる鐘 鐘窟 神祕鏡 海水中の自然林 原始界の光景 現世の饑鬼道 狂風の記 珊瑚島の美觀 無爲にして化せる絶海の孤島 豚小舎に於ける奇なる經驗 壯絶なる島影美 驚ろくべき断層 神仙の通路(三里の天橋) 琉球に學ぶべきもの 仙島の一夜一等

伊 藤 銀 月 著 草 鞋 日 記

(俗 風 及 然 自 の 道 海 東)

金 十 五 錢 郵 稅 六 錢

●東京
海道研究の風を起すの緒を披きたる著者は、此梅花の春に於て、更に東京より京都までの一頭地を抜けるは云ふも管なり、箱根の陸路は昔の靈助の殘骨なる丁親仁に、案内者を備ふて兼平が越えし「馬の細道」を探り、金谷の宿の曉夜には、穉穉時代の川越人尼を招きて大井川の古へを語りしめ、熱田桑名間の海上七里を舊法の如く舟にて過ぎ「坂は照るく」の歴史の俗語を聞くべく關の宿に滞り、關の小萬の化身の如き女性と道連れになりて鈴鹿の峻坂を登り、春寒き近江路を詩の如く行きし等、著者に之を爲さしめて始めて趣味あり、且つ著者にあらすんば断じて爲す能はざる事多し、最下稀有の珍書とは、真正正銘懸値の無き所也
●編輯

安部磯雄著

應用市政論

詩人カウパー曰はすや神は田舎を造り人は都市を造ると、今日の都市は實に人類をして天然に遠ざからしめ、健康を害せしめ、生命を短縮せしむるものにあらずや、苟くも此冷酷なる墓場を化して、愉快なる住所たらしめんとするものは先づ、都市問題を研究するの覺悟なかべからず。

本書の目次

總論○市の立法及び行政○市區改正及道路○道路掃除及び汚物掃除○交通機關○水道○瓦斯事業○電氣事業及電話事業○公園○家屋○食物の供給○衛生○警察と消防○教育○慈善事業○買店と貯蓄銀行○財政○都市の修飾

安部磯雄著

理想の人

七版 定價七十錢 郵税金八錢

著者が口には筆に修養を説くもの並に二十有餘年今や倫理宗教教育家庭社會の五方面より「理想の人」を論じて聊か修養の道に資する所あらんとす人は理想の政治家教育家文學家藝術家實業家たる前に先づ「理想の人」ならざる可からず高尚なる士君子と善良なる市民の眞面目を發揮し偽英雄似而非成功家を排斥し虛偽虚飾の貴族的道徳を痛罵して眞實純朴の平民的道徳を鼓吹する所著者の言論殊に痛快を極む

日本及日本人

芝原櫻田毅治町十番地編輯所
○毎月二回 政教社
○一冊十五錢 郵税一錢五厘
○半年十二冊 郵税八錢
○一年三冊 郵税一圓八十錢 (郵税不要)

「日本及日本人」新聞「日本」と雑誌「日本人」とを併せたるものなり。なる權威を有したりしが、新社長代るに及びて多年の主張を狂ぐるに達ひ、即ち雪嶺氏以下二十餘名の社員袂を連ねて退き「日本」の精神を廢滅せしめたり。また社會、文藝、宗教の各方面に於て重鎮たりき。一「日本及日本人」は「日本」の精神を「日本人」に併せたるものにして、改題以後日尙ほ淺しと雖も、己に鬱然として政界、思想界共に重きを置けり。一毎號必ず數篇を掲ぐる三宅雪嶺氏の論文は、今や本誌を措きて又見るを得ざるものとなれり。觀察の奇警と行文の壯重と相俟つて反映す。一原生界と副生界」は雪嶺氏が哲學上の大文字にして、連載已に三十餘回、また思想界の異觀たり。一古島一雄氏の人物評論、八太霞山氏の海外時論、混世氏の學海源流、國分青屋氏の評林、三宅花圃氏の史の趣味、長谷川胡蓮氏の小説、井上藁村氏の露國文藝家列傳、河東碧梧桐氏の一日一信、内藤鳴雪、河東碧梧桐南氏選の俳句、笠盛主人の篆刻、内藤湖南氏外有名家及政教社同人の時事評論、角田劔南、千葉江東雨氏の文藝評論等、每號各様の光彩を放つ。

秘兌元

東京々橋區五郎兵衛町廿二
(振替貯金口座三八一七番)

金尾文淵堂

エト7W-35

早稻田文學

編輯所 東京牛込區藥王寺前町廿番地
早稻田文學社
東京牛込區矢來町廿二番地
文藝協會事務所
○每月一回二日發行一冊廿錢郵稅一錢半
○一年前金二圓四十錢(郵稅不要)

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎮たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。

一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小説、詩歌、脚本等の創作、翻譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選拔採録すると共に、毎號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作翻譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。

一本誌の彙報欄は文藝教育諸方面の現状を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一陣の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。

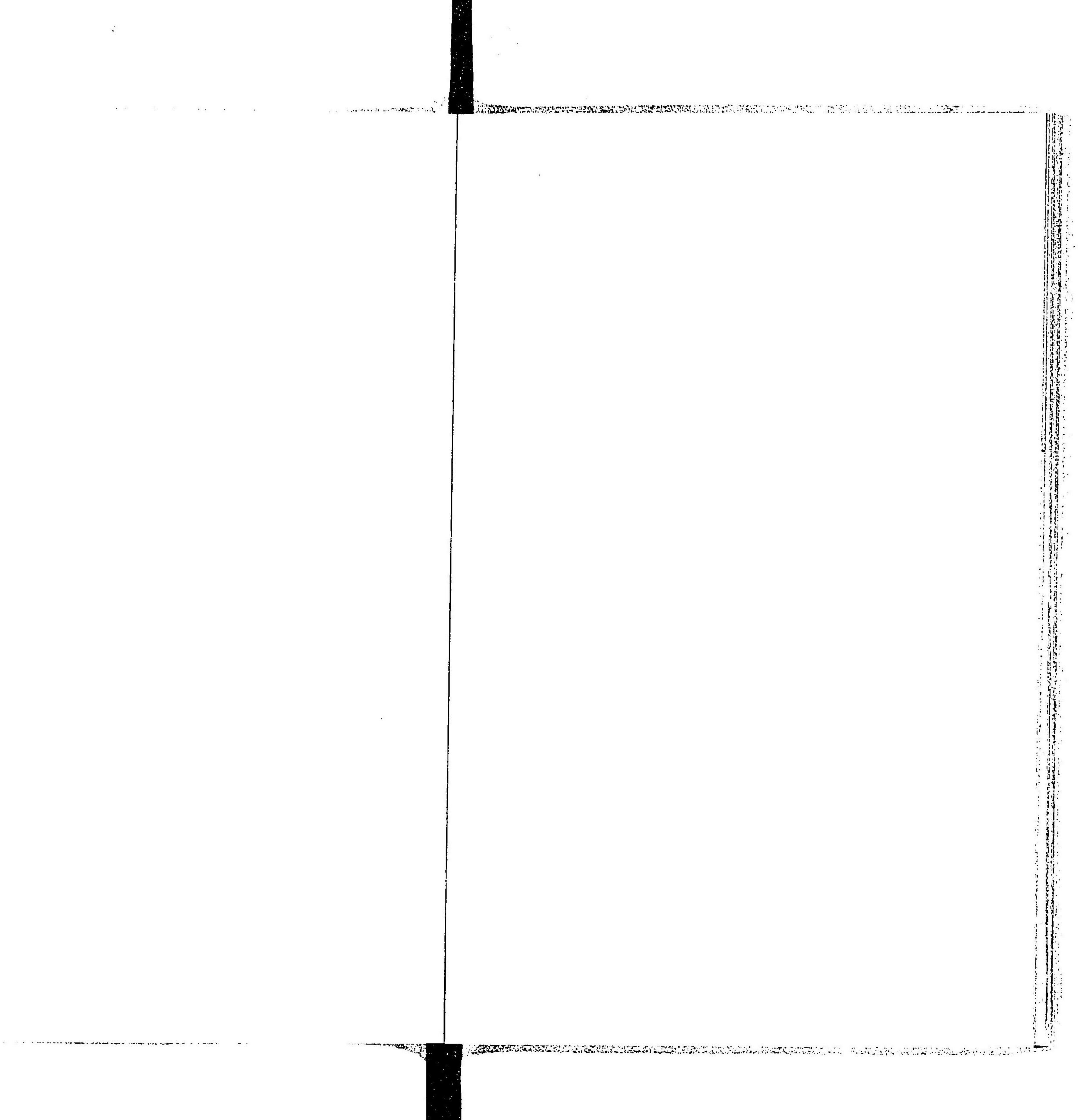
一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。

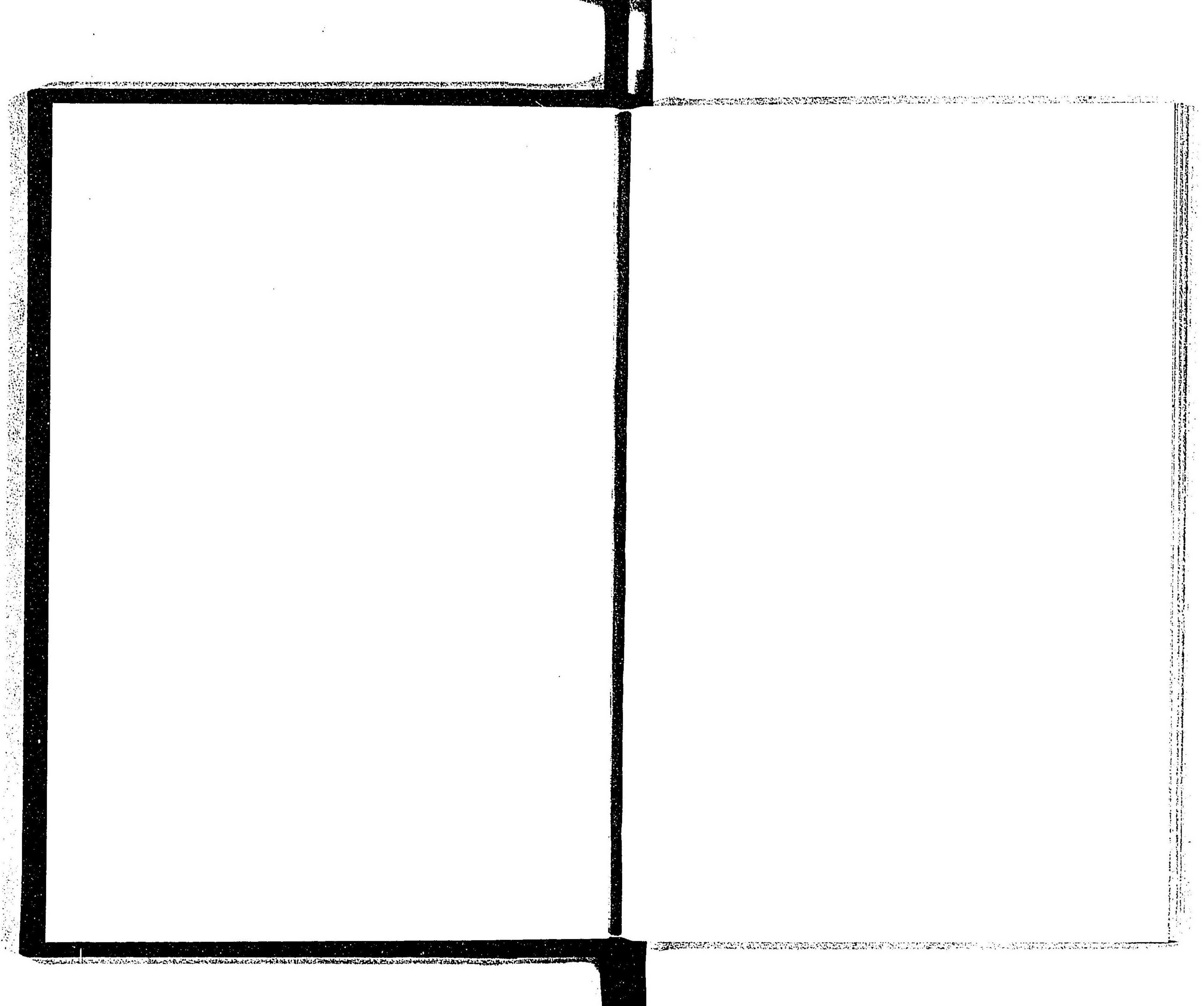
一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採録する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

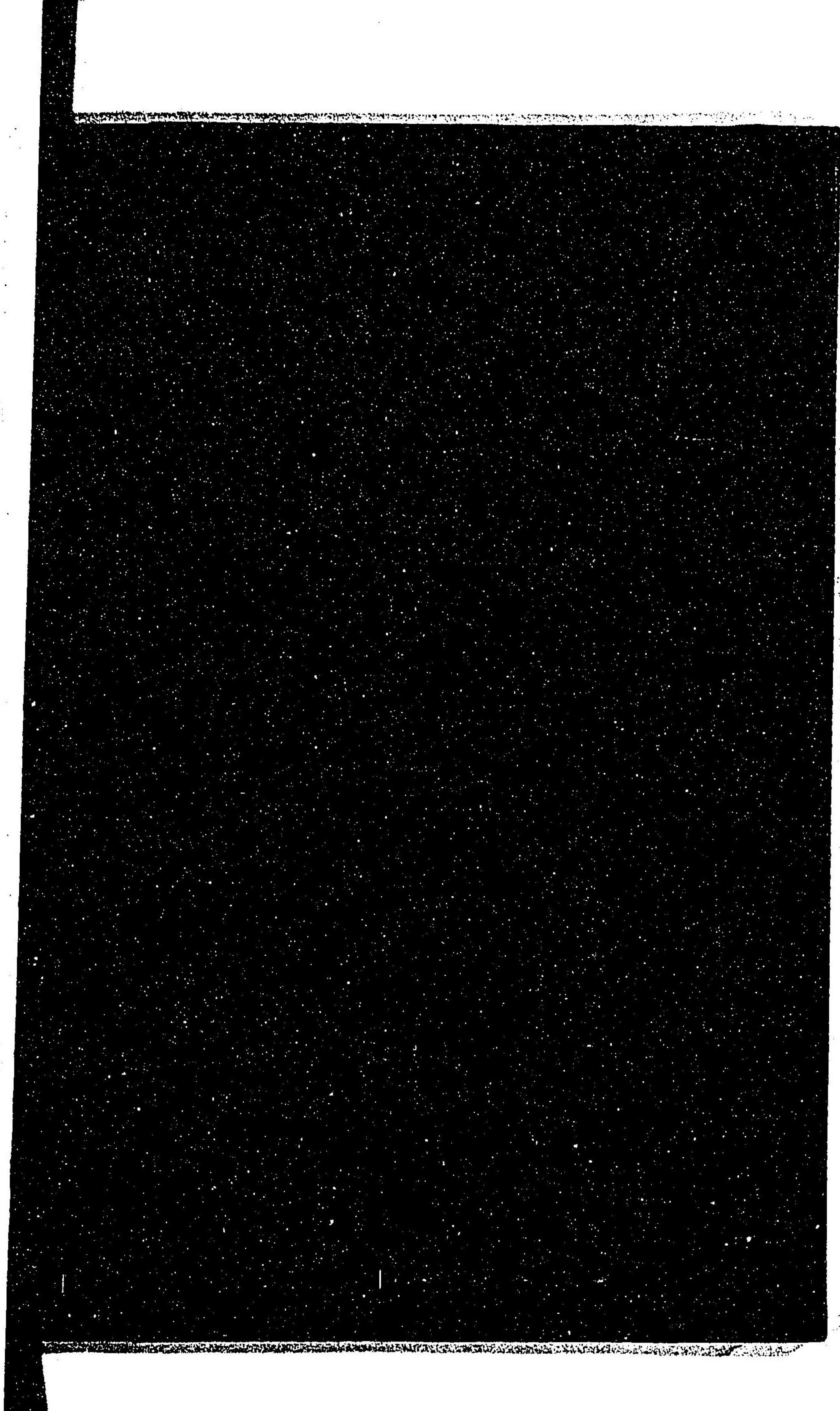
發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地

金尾文淵堂







31
385

205078-000-2

31-385

鷗心録

角田 浩々歌客 / 著

M40

EDV-0079



